

史 跡

# 上之國勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査整備事業概報—



1989・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

# 上之國勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査整備事業概報—

1989・3

上ノ国町教育委員会



# 序

国指定史跡上之國勝山館跡の環境整備事業は昭和54年に着手し本年をもって10カ年を経ました。

百数十年の長期に亘る館の存続、膨大な量、豊富な内容の出土遺物等はいづれも当初の予想を遥かに超えるものであり、様々の遺構も検出され、勝山館跡の重要性が次第に明らかとなって参りました。

この間、勝山館の内容が諸出版物等でも紹介されその存在がようやく知られるようになって参りましたが、尚解明されるべき問題が山積しております。

此度文化庁記念物課の格別の御理解を賜わり、京都大学教授朝尾直弘先生、神奈川大学教授網野善彦先生、東京大学教授石井進先生、函館大学教授榎森進先生、山形大学教授仲野浩先生を当町の文化財保護審議会特別委員、勝山館跡調査研究専門員としてお迎え申し上げることができ、現地調査、御指導を賜りましたことはこの上ない喜びとするものであります。御多忙中にもかかわらず私共のお願いをご快諾下さった諸先生に心から御礼申し上げますとともに、このことの実現について砕心、ご尽力を賜りました仲野浩先生に深く感謝申し上げますのであります。

諸先生の御力により勝山館や、中世の上ノ国の世界が一日も早く明らかにされることを願っております。

上ノ国町が構想中の「北海道中世の丘」建設にも勝山館は重要な位置をなすものと思われまます。

町づくりの事業との連携もさせながら、更に本事業の前進を期すものであります。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層の御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 和 泉 定 夫



# 本文目次

序  
本文目次／表目次  
例言／引用参考文献

I 調査概要	1
II 遺構確認調査	3
1 調査目的	3
2 検出遺構と遺物	3
1 櫛列跡の調査	3
(1)位置概要	3
(2)層序	3
(3)櫛列跡	3
(4)出土遺物	9
a 陶磁器	
b 金属製品	
c その他	
2 空塚跡の調査	12
(1)位置概要	12
(2)層序	12
(3)空塚跡	12
(4)柱列	12
(5)出土遺物	17
a 陶磁器	
b 金属製品	
c 木製品	
d 石製品他	
(6)土壌	24
3 空塚東平坦面の遺構と遺物	35
(1)位置概要	35
(2)層序	35
(3)検出遺構	39
a 掘立柱建物跡	
b 竪穴遺構	
c 焼土	
(4)出土遺物	51
a 陶磁器	
b 金属製品	
c その他	
4 15LM区試掘調査	56
(1)位置概要	56
(2)層序	56
(3)遺物	56

III 小括	59
IV 保存処理	62
V 植物遺存体の同定	63
VI 環境整備工事	64
VII まとめ	65

# 挿図目次

第1図 調査位置図	2
第2図 調査区位置図・櫛列跡土層堆積図	4
第3図 櫛列跡平面図	5
第4図 櫛列跡周辺出土遺物①	7
第5図 櫛列跡周辺出土遺物②	8
第6図 空塚跡・同東平坦面土層図	13
第7図 空塚跡柱列	9
第8図 空塚跡覆土出土遺物①	21
第9図 空塚跡覆土出土遺物②	22
第10図 空塚跡覆土出土遺物③	23
第11図 土壌墓(平面図・セクション図)	25
第12図 土壌墓遺物分布状況(釘・その他)	26
第13図 土壌墓出土遺物(釘)	27
第14図 土壌墓出土遺物(釘)	28
第15図 土壌墓出土遺物(釘)	29
第16図 土壌墓出土遺物(釘)	30
第17図 土壌墓出土遺物(釘)	31
第18図 土壌墓出土遺物(釘・銅製品)	33
第19図 土壌	34
第20図 第1号建物跡想定図	35
第21図 第2号建物跡想定図	36
第22図 第3号建物跡想定図	37
第23図 第4号建物跡想定図	40
第24図 第5号建物跡想定図	41
第25図 第6・第7建物跡想定図	42
第26図 第35号竪穴平面図	43
第27図 第36号竪穴平面図・出土遺物	44
第28図 第37号竪穴出土遺物	45
第29図 焼土①	47
第30図 焼土②	48
第31図 焼土③	49
第32図 空塚跡東平坦面出土遺物①	53
第33図 空塚跡東平坦面出土遺物②	54

第34図	空壕跡東平断面出土遺物③	55
第35図	15Lトレンチ・セクション図	57
第36図	木製品重量変化グラフ	62
第37図	説明板詳細図	64

## 表目次

表1	16J18・23区北壁土層観察表	7
表2	17I9・14区北壁土層観察表	8
表3	16J13・8・15J23北壁土層観察表	15
表4	16I14～15I19北壁土層観察表	17
表5	15J5・10・15南壁土層観察表	18
表6	第35号竪穴覆土土層観察表	43
表7	第36号竪穴覆土土層観察表	44
表8	焼土成分表	50
表9	空壕跡東平断面出土遺物集計表	52
表10	15Lトレンチ空壕A空壕B土層観察表	58
表11	遺物集計表	61

## 写真図版目次

P L. 1	勝山館跡遠景
P L. 2	調査区全景
P L. 3	調査状況
P L. 4	遺構検出状況

P L. 5	検出遺構
P L. 6	土層堆積状況
P L. 7	出土遺物
P L. 8	出土遺物
P L. 9	調査・遺構検出状況(櫛列・空壕跡)
P L. 10	遺構検出状況(空壕・柱列・土坑墓)
P L. 11	建物跡全景
P L. 12	環境整備工事・遺物出土状況
P L. 13	出土陶磁器(櫛跡周辺)
P L. 14	出土陶磁器(青磁・白磁・染付・空壕覆土)
P L. 15	出土陶磁器(美濃・唐津・越前・空壕覆土)
P L. 16	出土鉄・木・石製品
P L. 17	出土陶磁器
P L. 18	出土陶磁器他
P L. 19	出土陶磁器他
P L. 20	骨角器他
P L. 21	保存処理完了遺物
P L. 22	植物遺存体同定写真①
P L. 23	植物遺存体同定写真②
P L. 24	植物遺存体同定写真③

附図 調査区地形遺構配置図

## 例 言

1、本書は史上之国跡山館跡の昭和63年度環境整備事業に伴う遺構確認発掘調査と環境整備工事について概要をまとめたものである。

2、環境整備工事については文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学 足達富士夫先生、建築遺構の調査検討には同じく、文化学院 鈴木亘先生、歴史的考察等については同じく、函館大学 榎森進先生、山形大学 仲野浩先生、東京大学 石井進先生、神奈川大学 網野善彦先生、京都大学 朝尾直弘先生から御指導を賜わった。

3、本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。

調査主体者 上ノ国町教育委員会 教育長 和泉定夫

上ノ国町文化財保護審議会特別委員 北海道大学教授 足達富士夫、文化学院講師 鈴木亘、函館大学教授 榎森進、山形大学教授 仲野浩、東京大学教授 石井進、神奈川大学教授 網野善彦、京都大学教授 朝尾直弘

主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長

関登志夫

修景技術専門員 山崎重任（上ノ国町建設課長）

発掘担当者 学芸員 松崎水穂

調査員 学芸員 斉藤邦典

藤田登（森町教育委員会）

4、本書は、松崎・斉藤が協議の上分担作成した。

執筆文担は文末に示した。尚、Vについては東京大学総合資料館松谷晚子氏から玉稿を頂戴した。

5、挿図の作成は執筆者の指示に従い作業員が行った。挿図中の北方位は真北を示す。

6、調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜わった。（順不同）

文化庁記念物課 狩野久、安原啓示、加藤允彦、服部英雄、須田勉、松村志司、北海道教育庁文化課 豊田敏夫、増田信幸、調査班 森田知忠、木村尚俊、工藤研治、北海道教育庁松山教育局 村山誠己、東洋文庫 渡辺兼磨、国立歴史民俗博物館 福田豊彦、佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二、愛知県陶磁資料館 仲野泰裕、平泉町郷土館 荒木伸介、建造物保存技術協会 高原孝、北海道埋蔵文化財センター 大沼忠春、前田正憲、八王子市教育委員会 新藤康夫、松村富男、八戸市教育委員会 佐々木浩一、大朝町教育委員会 上原隆弘、豊平町教育委員会 園山龍溪、浪岡町教育委員会 工藤清泰、松前町教育委員会 久保泰、乙部町教育委員会 森広樹、森町教育委員会 藤田登、七飯町教育委員会 石本省三、八雲町教育委員会 三浦孝一、江差町教育委員会 藤島一己、木古内町教育委員会 鈴木正詔、余市町水産博物館

作業員

糸畑勝恵、表ミキ子、笠谷奈智子、岸田慶子、鈴木栄一、高橋江里香、高橋裕子、竹内江美子、中里栄子、中里朋子、西村よね子、沼沢国枝、八田陽子、平野キヌ子、山崎洋子、鷺田フミ子、小澤光明、草間栄、小林喜幸、佐藤孝、澤田資久、武田連人、野坂浩二、長谷川貴俊、石田健滋、森義裕、高橋秀次、竹内力、長谷川義憲、松谷隆利、若狭明、小松伸吾、品田英生、田畑内匠、出口雄二、八田千寿、円子智志、佐藤勝久、加賀厚、大原博之



## 引用参考文献

- 鏡と銅と玉 1931年 高橋健自  
刀剣 日本の美術6 1966年 佐藤栄山  
仏具 日本の美術16 1967年 藏田藏  
茶道具 日本の美術22 1968年 藤岡了一  
甲冑 日本の美術24 1968年 尾崎元春  
民具入門 考古民俗叢書 1969年 宮本誓太郎  
刀装具 日本の美術64 1971年 加島進  
世界陶磁全集14 明 1976年  
釣針 ものと人間の文化史17 1977年 直良信夫  
臼 ものと人間の文化史25 1978年 三輪茂雄  
珠洲古陶 1978年 石川県立郷土資料館  
珠洲古陶 越中における展開 1980年 高岡市立  
美術館「睦」会  
はきもの ものと人間の文化史8 1981年 潮田  
鉄雄  
貿易陶磁研究 No.1 1981年  
貿易陶磁研究 No.2 1982年  
貿易陶磁研究 No.3 1983年  
貿易陶磁研究 No.4 1984年  
北海道の鉄鍋について 物質文化42 1984年 越  
田賢一郎  
近世城館跡の陶磁ノート 研究紀要4 1985年  
井上喜久男 愛知県郷土資料館  
日本常民生活絵引 1987年 池澤敬三  
内耳鍋の研究 1987年 足立順司 静岡県歴史文  
化財調査研究所  
美濃陶磁器研究の現状 考古学ジャーナル297  
1988年 井上喜久男  
瀬戸・美濃における大窯生産 岐阜市歴史博物館  
研究紀要第2号 1988年 伊藤嘉章  
美濃窯の研究 東洋陶磁第15、16号抜刷 1988年  
井上喜久男  
北海道における中、近世考古学の現状と課題 物  
質文化50 1988年 越田賢一郎  
アイヌの伝統的漁具（マレク）の成立背景に関す  
る一試論 物質文化51 1989年 出利業浩司  
よみがえる中世2 本願寺から天下へ大阪 1989  
年  
よみがえる中世3 武士の都 鎌倉 1989年

# I 調査概要

## 1. 調査

本年度調査対象地区は館主要平坦部北側肩部分及び段下の大手空壕地区である。尚同地区は中央部を東西に御代参道路が走り南北に二分されている。今年度は昭和62年度トレンチ調査を行なった南側部分を主体に行なった。調査は6月1日より12月3日まで行ない、1,500㎡実施した。調査方法は従来通り20m×20mの大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式、また大手空壕地区西側部分は3.5m×14mのトレンチ方式とした。さらに大手空壕地区東側部分の平坦面の調査に際しては、従来通り柱穴配置略図を作成し柱穴間の重複、覆土の状態を観察しながら柱穴を掘り下げた。高焼土等は半載しセクション図作成後掘り下げ土壌のサンプリングを行なった。遺物取り上げはI、II層は4m×4mのグリッドを4分割した2m×2m毎の一括取り上げ、遺構面であるIII層は実測図作成後レベルを附して取り上げた。

- 6月 大手空壕地区東側平坦部伐開、表土剥ぎ。  
4m×4mグリッド設定。遺構確認作業。焼土、柱穴、37号竪穴確認。
- 7月 大手空壕地区東側平坦部柱穴確認作業。同柱穴配置略図作成、36号竪穴確認、焼土平面図、セクション図作成。段急傾斜面表土除去。
- 8月 段急傾斜面表土除去。空壕A・B表土除去、同確認調査、遺物分布図作成。土葬墓検出。
- 9月 空壕A・B調査、同東西セクション図作成。土葬墓調査、同セクション図作成。
- 10月 大手空壕地区東側平坦面調査、35号竪穴確認、37・36号竪穴セクション図作成。土葬墓遺物分布図作成、同実測、写真撮影。
- 11月 大手空壕地区北側部分トレンチ設定、表土剥ぎ、同調査。同地区で空壕A・B確認、同実

測、写真撮影、段上肩部分表土剥ぎ、調査。同地区で棚列確認、同実測。空壕A・B実測、写真撮影。大手空壕地区東側平坦面実測、写真撮影。調査区埋め戻し。

12月 調査区埋め戻し、終了。

## 2. 基本層序

I層 表土層。10Y R $\frac{5}{6}$ 暗褐～10Y R $\frac{7}{6}$ 褐シルト。草根多量。やや密。

II層 館廃絶後の自然地積層。10Y R $\frac{5}{6}$ 暗褐～10Y R $\frac{7}{6}$ 褐シルト。やや密。炭化物、OS-a混入。細分される。OS-a純層も含まれる。

III層 館機能時の整地盛土層。10Y R $\frac{5}{6}$ 褐～10Y R $\frac{7}{6}$ 黄褐。密。ソフトローム粒、炭化物等多量に含有する。細分される。

IV a層 縄文期以後より館が機能する直前までの自然地積層。黒、シルト～7.5Y R $\frac{5}{6}$ 暗褐、シルト。従来までのIV b層はIV a-1としIV a層の中を含めた。

IV b層 10Y R $\frac{5}{6}$ 明黄褐火山灰。やや密。

IV c層 縄文期包含層。10Y R $\frac{5}{6}$ 褐、シルト、やや密。

V層 10Y R $\frac{5}{6}$ にふい黄褐～10Y R $\frac{7}{6}$ 黄褐、ソフトローム。

## 3. 環境整備

今年度は調査区内の段急傾斜面、空壕A・Bの芝張1,100㎡を行なった。

## 4. 保存処理

昭和58年度より国の補助を得て勝山館跡出土の鉄製品、木製品、漆器の処理を行なっている。今年度は鍋、火箸、小柄、小札等の鉄製品を600点、箸、折敷、木榎等の木製品1,016点の処理を行なった。  
(斉藤)



## II. 遺構確認調査

### 1. 調査目的

昭和61年度に仮整備を行い30年代以降の人工林を除き茅等を刈り取った。その結果正面に大きな段が出現しその前(東)方にも小さな段がつくられている事が判った。更に旧土地所有者から段直下はかつて凹みを持っていた事などの話を聞き、空堀等の存在が推測され63年度トレンチ調査を実施した。この結果段上で巾25~30cm、深さ40~50cmの溝と柱列が2~3条検出され櫛列跡とした。この内側直近にも柱穴があり、櫛の付属施設等の存在も推測された。段直下には巾7.8m余、深さ2.4mと巾2m深さ1.5mの2条の空堀を検出した。又塚の外側は整地された平坦地となり柱穴が検出され、竪穴遺構の存在も推測された。

これらの経緯から63年度は段上の櫛列の規模、新旧等の確認、櫛列内側の付属施設等の検出、段下部空堀跡の規模、新旧の確認、空堀外側平坦面の性格解明等を調査の目的とした。又館中央を通る遊歩道北半平坦部での遺構確認調査を実施した。

### 2. 検出遺構と遺物

#### 1. 櫛列跡の調査

##### (1) 位置・概要

勝山館の主体部は南東・北西を宮ノ沢川と寺ノ沢川に挟まれた台地上に占地している。この台地は前後三段の大きな平坦面につくられ、それぞれが更に地割されている。この一段目と二段目の平坦面は5m余と最も大きな段差を有している。この二段目の平坦面端部で櫛列が検出され、その直下、第一平坦面の付根に空堀が検出された。塚は付根から前方15m程の間に2条走り、塚の外側約10mまで小平坦面が続き1.7mの段差を持って前方の次の段となる。

##### (2) 層序(第2図)

調査区南北での土層観察によれば平坦面端部付近は45~60cmの盛り土整形されたIII層が堆積している。この上面から溝を掘り柱を埋設して櫛列としている。溝の中は15~30cm深さは42~63cm程である。断面で見ると限り柱の下端は水平をなすようである。又埋設される深さはほぼ溝底までの50cm前後である。2、3条の溝跡があり北16J区の断面での新旧は明らかでないが、南17I区では内側が新しい。<sup>21)</sup>

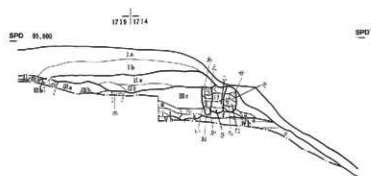
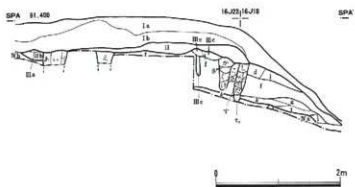
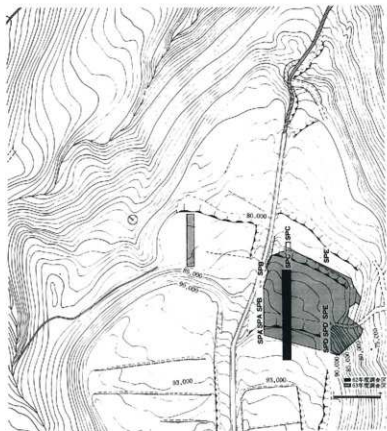
(松崎)

### (3) 櫛列跡

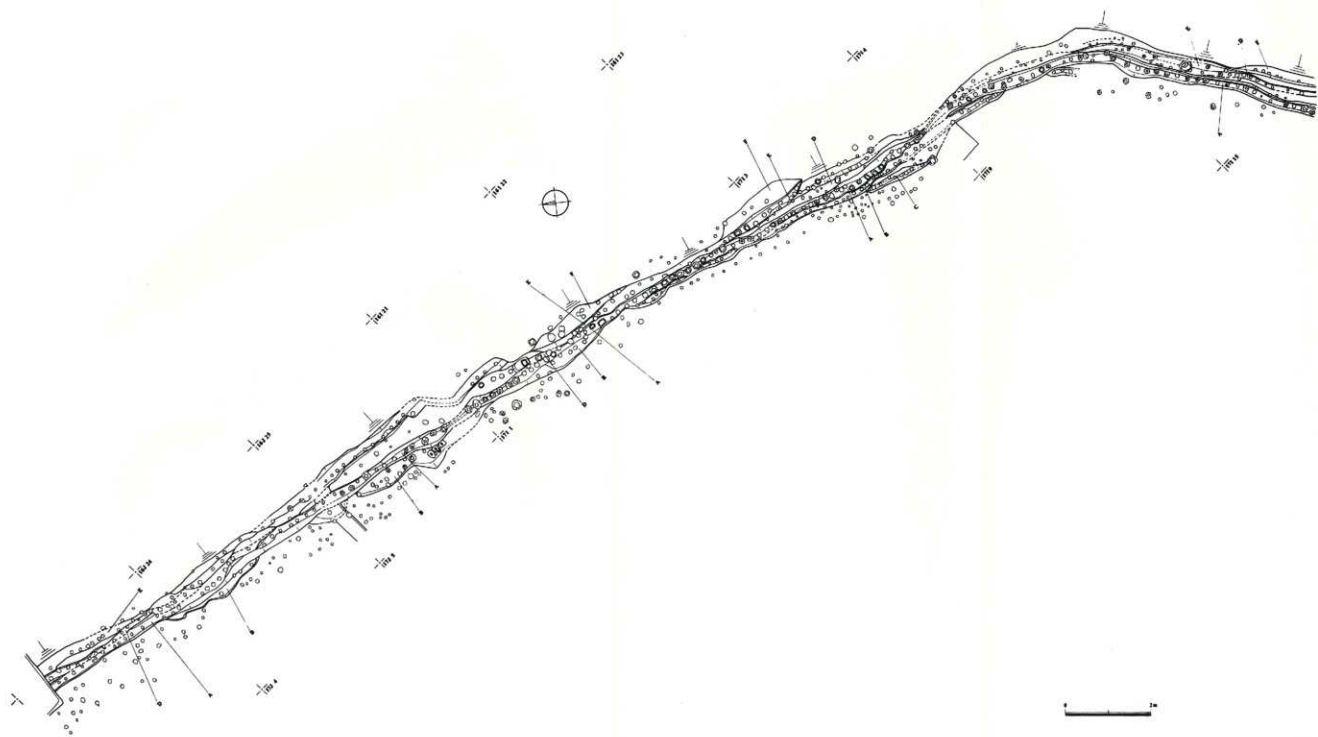
昭和62年度のトレンチ調査により検出された。館主要平坦面東側肩部分に位置する。櫛列の広がりをつかむ事を目的とした。今年度は館中央部を東西に走っている御代参道路より南側の16J23区~17I5区、幅3m×長さ32m程の調査を行なった。その結果III層を掘りこみ面とした櫛列群が確認された。

#### a. 規模・形態

櫛列跡は16J23区より17I4区までN28°Wを基軸として走り17I5区よりN17°E方向に屈曲する。さて櫛列は並走あるいは重複しながら6条確認された。図上ではA~Fと仮称した。その規模は櫛列Aは溝の幅25~30cm、深さ17~25cm程で中に直径7~16cm、深さ8~30cm程の柱穴が5~15cm間隔で入る。17I1区~2区付近が柱穴も大きく、深い。また柱穴の間隔が最も狭いようである。櫛列Bは櫛列Aの西側にある。溝の幅は7~25cm、深さは6~20cm程で中に直径8~12cm、深さ10~26cmの柱穴が7~17cm間隔で入る。17I1区~17I4区附近が比較的規則性をもち柱穴が配置される。また柱穴も太い。櫛列Cは櫛列Bの内側にある。溝の幅は15~20cm、深さは4~6cm程で中に直径4~9cm、深さ6~12cmの柱穴が4~8cm間隔で入る。17I3区附近に若干残存するのみである。櫛列Dは櫛列Aの東側にある。溝の幅は16~20cm、深さは10cm程で内側に直径6~10cm、深さ8~20cmの柱穴が10~15cm間隔で入る。16J25区~17I3区までは溝が確認されず柱穴のみである。櫛列Eは櫛列Dの東側にある。溝の幅は17~20cm、深さは10cm程で内側に直径5~16cm、深さ5~15cmの柱穴が6~15cm間隔で入る。17I2~3区附近が柱穴も大きく、深く、その間隔が最も狭いようである。櫛列Fは櫛列Eの東側にある。溝の両上端が確認できず柱穴のみであった。柱穴は直径6~15cm、深さは10~23cm、その間隔は18~33cm程である。17I1区附近が柱穴も大きく深い。さてこれら櫛列A~Fは北西~南東方向へ走っており、その新旧関係は櫛列Aは他の櫛列B~Fに切られず調査区間内を一本になって伸びている事より最も新しい時期のものである。他の櫛列については櫛列Aを基準として見ると、櫛列Aより西側では



第2図 調査区位置図・掘列跡土層堆積図



第 3 图 槽列平面图

17 I 1 ~ 4 区では欄列 B は欄列 A に切られている。  
17 I 3 区では欄列 C は欄列 B に切られている。築造順としては古い方より欄列 C → 欄列 B → 欄列 A となる。欄列 A より東側では 17 I 1 区付近で欄列 D は欄列 A・E に切られている。築造順は古い方より欄列 D → 欄列 E → 欄列 A となる。欄列 F は最も東側にあたり欄列 E と隣接しているが、欄列 E との新旧関係は不明である。これらよりみると

欄列 A が欄列 A ~ F の中央部を走っているため欄列 A と欄列 A の東側欄列 B、欄列 C 及び欄列 A と欄列 D、欄列 E の新旧関係は判明したが欄列 B、欄列 C と欄列 D、欄列 E の新旧関係が不明である。1989 年度の調査では御代参道路より北側の台地層の調査を行なう予定であり、欄列群の新旧関係等を 1989 年度の調査の課題としておきたい。(齊藤)

表 1 16 J 18・23 区北盤土層観察表①

層	序	色		調	組成	備考
		JIS notation	土色表			
I	a	10Y R/5	暗褐	*	シルト	やや粗
	b	10Y R/5	*	*	シルト	やや密
II		10Y R/5	*	*	シルト	やや粗
III	a	10Y R/5	黄褐	*	ロームブロック混入	
	b	10Y R/5, 10Y R/5	褐、黄褐	*	ロームブロック 2%	やや粗
	c	10Y R/5, 黄	*, 暗褐	*	シルト	やや粗
	d	10Y R/5	褐	*	ロームブロック 10% とシルト	やや密
	e	10Y R/5 ~ 黄	褐、黄褐	*		やや密
	f	10Y R/5, 10Y R/5	12.5Y 黄褐、黄褐	*	ローム 80% 炭化物 10% と混入シルト	やや粗
	g	7.5Y R/5	褐	*	シルト	やや粗
	h	7.5Y R/5	*	*	赤色土 70% 炭化物 10% と混入シルト	やや粗
	i	10Y R/5, 黄	暗褐、黄褐	*	炭化物 2% と混入	やや粗
	j	10Y R/5, 黄, 黄	黄褐、12.5Y 暗黄褐	*	ロームブロック混入、炭化物 10% と混入	粗粒
IV	① a	10Y R/5, 黄	褐、黄褐	*	ロームブロック 20%、炭化物 5% と混入シルト	やや密
	① b	10Y R/5, 黄	暗褐、黄褐	*	ロームブロック 5%、炭化物 2% と混入	やや粗 (柱状破 ?)
	① c	10Y R/5, 黄	12.5Y 黄褐	*	ロームブロック 30% 炭化物 2% と混入	黄、やや細かい
	② a	10Y R/5, 黄	*, 黄褐	*	ロームブロック 20% 炭化物 2%	やや密
	③ a	10Y R/5	*	*	シルト	粗粒
	④ a	10Y R/5	*	*	炭化物 10% と混入	やや密
	④ b	10Y R/5	*	*	ロームブロック 2%、炭化物 1% と混入	やや密
	④ c	10Y R/5	褐	*	炭化物 10% と混入シルト	やや粗
	④ d	10Y R/5	12.5Y 黄褐	*	ロームブロック 2%、炭化物 1% と混入シルト	
	⑤ a	10Y R/5	褐	*	塊 10% 混、炭化物 6% と混入シルト	やや密
	⑤ b	10Y R/5, 黄	暗褐、黄褐	*	シルト	粗粒
	⑥ a	10Y R/5	褐	*	シルト	日層の成分を含む
	⑥ b	10Y R/5	*	*	炭化物 10% と混入シルト	
⑥ c	10Y R/5, 黄	*, 黄褐	*	ロームブロック 20%、炭化物 1% と混入シルト	粗粒	
⑥ d	10Y R/5, 黄	12.5Y 黄褐、黄褐	*	ロームブロック混入、炭化物 10% と混入	粗粒	
⑥ e	10Y R/5	褐	*	塊 10% 混入シルト	粗	
⑥ f	10Y R/5	黄褐	*	塊 10% 混入、炭化物 10% と混入シルト	やや粗	
V	a		黄赤土	*	黄赤土	
	b	10Y R/5	褐	*	シルト	やや粗

表2 1719、14区北盤土層観察表

層 号		色		土 色 名	組 成	備 考
基本層号	小区分	編 号	JIS notation			
I		a	10Y R/5	暗褐	200系膨潤ローム粒混入	耕作土 やや固くしまる
		b	10Y R	*		
II		a	7.5Y R/5	*	炭化物混入	ソフト
		b	7.5Y R/5	にじみ層	火山灰含有30% ローム粒、炭化物混入	ソフト
		c	7.5Y R/5	暗		ソフト
III		a	7.5Y R/5	*	10以下系腐植、粘、炭化物、火山灰混入	ソフト
		b	7.5Y R/5	暗褐	200系混入、粘土層	
		c	7.5Y R/5、N	* 暗	2-400系膨潤粒、炭化物含有粘質土	かたい塊状、粘くと白色化する
		d	7.5Y R/5	暗褐		粗ソフト
		e	7.5Y R/5		ロームブロック含有	ソフト
		f	7.5Y R/5	明褐	火山灰、ロームブロック混入	
		g	7.5Y R/5	*	火山灰混入	かたい
		h	7.5Y R/5	暗	火山灰、炭化物混入	
		i	10Y R/5	*	炭化物混入	シルト
		j	10Y R/5	暗褐	ローム粒、炭化物混入	
		k	10Y R/5	暗	火山灰、炭化物混入	密、かたい
IV	①	あ	7.5Y R/5	*	高級結炭化物含有	ソフト
		い	7.5Y R/5	*	300系膨潤粒、ロームブロック混入	
	②	う	7.5Y R/5	*	高級腐植土	固くしまる
		え	7.5Y R/5、N	暗褐、暗	2-300系膨潤粒炭化物含有	
	③	お	10Y R/5	暗	炭化物含有	およりやや明るく、固い 強い 粘、ちろい ソフト
		か	10Y R/5	*		
		き	10Y R/5	*		
		く	10Y R/5、N	*、暗褐		
		け	10Y R/5	暗褐		
		こ	7.5Y R/5	明褐		
	④	し	7.5Y R/5	暗	200系膨潤含有、塊状、粘質土 炭化物塊層含有 下位100系大粒土塊、炭化物塊層含有	ソフト
		す	7.5Y R/5	*		
		せ	7.5Y R/5	*		
		そ	7.5Y R/5	*		
		た	7.5Y R/5-N	*		
		ち	7.5Y R/5	*		
		つ	7.5Y R/5-N	明褐、暗		
⑤	て	7.5Y R/5	暗	膨潤粒含有	粗 ソフト	
	と	7.5Y R/5	暗	200系膨潤含有	粗 ソフト	
	な	7.5Y R/5	暗	炭化物含有	ソフト	
	に	7.5Y R/5	暗	粘質土 高級腐植土含有 炭化物塊層含有	粗、かたい	
	ぬ	7.5Y R/5	暗		粗、かたい	
V		a	7.5Y R/5-N	暗褐	腐植	密 ソフト
		b	7.5Y R/5	暗褐		密 ソフト
		c	7.5Y R/5-N、10Y R/5	暗		密 ソフト



#### (4) 出土遺物

棚列の南、平坦部で陶磁器、鉄製品等が出土した。

##### a. 陶磁器

青磁、白磁、染付、赤絵、瀬戸・美濃灰釉・鉄釉、唐津の碗皿類、珠洲系、瀬戸・美濃、越前の楕鉢、甕等が出土している。(PL13-1-19、21-69、73、75-79、14-36・37、15-14・23・32・58、17-34・41、19-1-5、第4・5図)。

青磁：莚削り蓮弁文の浅い皿、線描き蓮弁・無文碗、稜花皿がある。

白磁：腰部以下露胎で高台が削り出しの輪高台又は挟りのつく硬質の丸皿、端反りの丸皿、腰部をもたず一気に外反する皿、筒型の碗と推されるものなどがある。8は陶質の底部破片で削り出しの高台が着く。

染付：蓮子と体部の直立する角形の碗、糸底端反りと基前底の丸皿がある。19は見込み部分が平らで蛇の目に作られる。口縁には省略された波頭文?が描かれ、高台ウラには放射状にカンナ目が残る。蓮子碗の一と推する<sup>註1</sup> PL17-34も同類である。37は外面と見込み全体に唐草文を描く皿である。見込みの花は牡丹か。24、25の口縁内側は線のみである。

瀬戸・美濃：灰釉は碗、皿、袋物である。38、39は端反りの碗で線描きで側先型の蓮弁文が施されている。又43、45は柳状具で線描きされたものである。皿は端反り皿で菊、酢漿草等の印花が押される。49、50は小型のもの、51は雙皿である。15-14は見込みが盛り上る内はがしのものである。高台ウラにト子痕が残る。53は内面轆轤輪軸形痕の残る袋物下部である。透明度の高い釉調である。

鉄釉は碗と皿である。60、65-67は小片であるが輪高台で高台脇の削り巾が狭いもの、56は頭部がくびれ内反りの高台がつくものと推される。68は輪高台で高台脇が広く高台径もやや大きい例である。69は大ぶりの碗又は袋物と思われる。一部火を被っているが漆黒の釉が内側ともにかけられている。64は湯底の皿で、茶褐色の釉が胴下部まで施され、一部3mm巾程の曇りまで下っている。73は唐津の直口する碗である。

楕鉢は越前、美濃、珠洲系のものがみられる。78は頭が大きくくびれ、口端は丸味をもってつくられ、口唇内側のゆるく傾いたところに櫛歯波状

文が施されている。胎土は軟らかみで器面は赤褐色を帯びる。15-58も同様である。PL19-1は叩き目の顕著な壺又は甕である。内面が丹念に整えられ滑らかになっている。灰青色を呈し珠洲系と推される。5は越前の壺かと推する。内面に成形時に内側からおさえた跡が残る。

##### b. 金属製品

鉄、銅製品がある。

鉄製品：巾広の匙状のもの(PL16-52)口唇が肥厚し直下が幾分くびれる容器の破片等がある。

銅製品：(PL19-35)は鍍の銅を地金とする破片である。推定7.5cm程の円形で5カ所にハート型の抉りをいれ変化をつけると思われる。周りは銀覆輪とし両面共縁に沿って三個の菊花が見られる。象嵌の有無は不明。耳に1カ所鋭い切れ込みがある。欠損した中央部分にも刻みがある。(10図26)。小柄は破損品が2点出土したが出土地点が近く、小口部分と底であり同一個体かも知れない。小口の方は残存する刀身が錆化膨張し包んだ銅が破れている。棟方、地板等に装飾はみられない。

##### c. その他

陶鍾(PL19-45)、縄文・権文土器等がある。<sup>註2</sup>

陶磁器の示す年代は、15世紀後半から16世紀末葉の間、殆ば勝山館の存続した全期間に亘っている。

青磁莚削り蓮弁文碗、白磁丸皿、瀬戸・美濃灰釉蓮弁文碗、端反り印花皿、鉄輪軸高台・高台脇削り巾の狭いもの、楕鉢等で珠洲系としたものなどは勝山館出土品中、古期のものである。瀬戸・美濃の物は火窯I期に属するものであり、珠洲系の楕鉢は珠洲のVI期頃に比定されるものであろう。又灰釉の内はがし雙皿や唐津は後半～末期のものである。内はがし皿は大窯II～III期に属するようである。

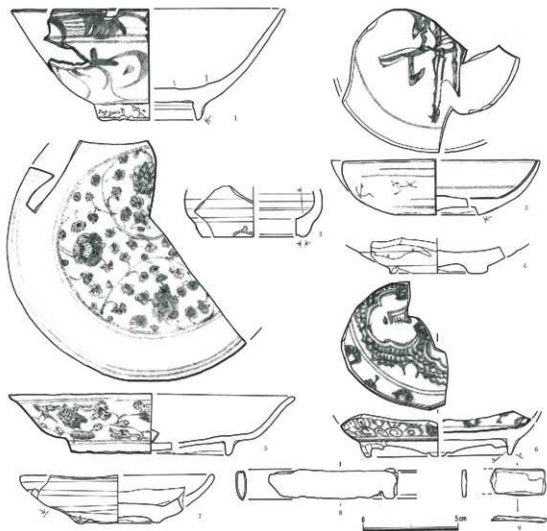
なお器種・製品は殆んどのものである。陶磁器の中に後述する空壕覆土出土のものや接合するものが数例あり、13-37などは二条の空壕を越えた東の平端部にまで広がっている。従って基本的に空壕覆土の遺物の殆んどはこの棚列周辺平坦面に帰属する遺物と考えられる。ここでは遺物の概略のみを記した。(松崎)

註1 63年度概報で外側刷新しいとしたがこれは更に検討を加えなければならないようである。

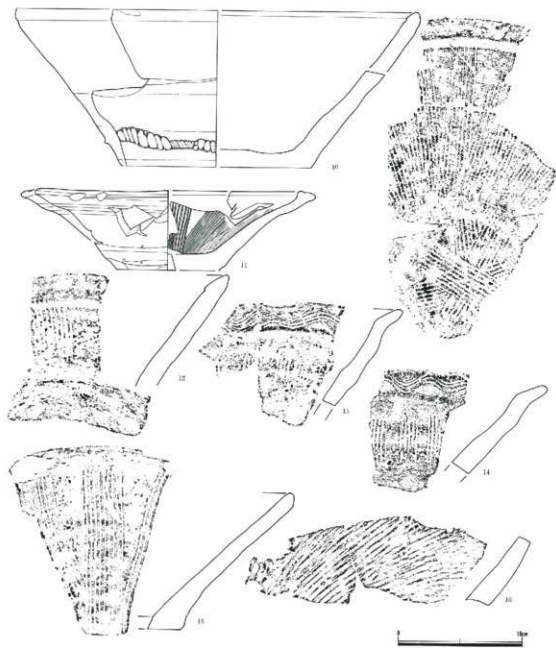
2 これに類するものをついて勝山館染付碗第I群としたが訂正したい(本概報Ⅳ)。

3 撞文土器は土器類が未整理であるのでそれらを併せ明らかにしたい。10年間で10片前後

を数えているが、未洗浄の土器片中に含まれているものもあるかも知れない。



第4図 櫛列跡周辺出土遺物①



第5图 榑列跡周辺出土遺物②

## 2. 空壕跡の調査

### (1) 位置・概要

第一平坦面と第二平坦面は約5mの比高差を持っている。この第一平坦面の一番奥、第二平坦面の直下に空壕が二重に切られている。この地区の旧地形は約30°の斜面であったがそれを70°余の急傾斜につくりかえ防壁を築いている。内側の壕はその角度のまま更に掘り下げられており、第二平坦面端部と壕底の比高差は8.3mになる。

二条の壕はほぼ併行して走り宮ノ沢に切り落とされる。壕と壕の間は小平坦面となるがその南東半で土埃群が検出された。その一基には木棺が納められ、人骨も認められた。他に、鉄製品の出土したものもある。

又、内側の壕の北東端では4対の大形柱穴が壕をはきんで検出されている。

### (2) 層序 (第6図、表3・4)

耕作土、再堆積層を主とする第I層、OS-aを鍵層とする第II層、館形成時の整地盛土の第III層、遺構覆土のIII層に区分される。第I層の再堆積層は基盤礫や、その細かく粒状化した小礫・粒と粘質土を多く含む層である。空壕Aの上位から崩落があったとの聞き取り内容をあて、空壕BのそれについてはOS-a降灰以降明治頃の整地を想定したところである(本概報IX)。空壕覆土がAとBで堆積量の異なる事についてはAが段直下にあるため上位からの土の流入による埋没量が多かったと推している。又ⅡA①とした壕北端面に凹みを持って堆積する層は、上位からの雨水等の流路を示すと思われる。

空壕Bに堆積するOS-aと解している火山灰がそれ以前で館形成期又はその直後に降灰した別のものである場合空壕BとAの関係は全く異なったものになる。後述の壕東の遺構が壕Bに平行して、その平坦部内でまわりを持っていて、空壕B覆土の遺物は大変少くしかも、I層中からの出土であること、PL、13-37のように第二平坦面から空壕A、BのI、II層、壕東にまで分布する遺物があることなどの知見と今後の壕中央部の調査結果を併せその結論を得る所存である。

### (3) 空壕

検出された空壕は2条である。

内側のAは巾5.3m-10.2m、深さ1.7m-3m。検出した延長44.4m。その南東34mからは宮の沢

に切り落とされるが途中から二手に分れ一方は第二平坦面の下位を取り巻いて南東斜面中腹を回り込む。今一方は第一平坦面の側方に延びている。この分岐点と第二平坦面上部との比高差は11.9m。又この一段低い位置での壕巾は、4m、深さは2m。壕の両側面は中央-西半では青灰色、赤褐色の軟質の岩盤層からなり、直線に近く仕上げられているが南東部から切り落とされる部位は劈開性の岩盤である為、階段状に近い。壕底に近い部分の両側は上半に比べ急角度をなす。壕底の巾は約30cm。中央付近がやや低く若干の水がたまる(但し壕全体を通して掘り上げた時北半がそのまま寺ノ沢側に傾斜して排水されることは考えられる)。壕掘り上げの明瞭な単位工程等は把握できなかった。南東半の堅い岩盤部の階段状の段差がそれを示すかとも思われる。

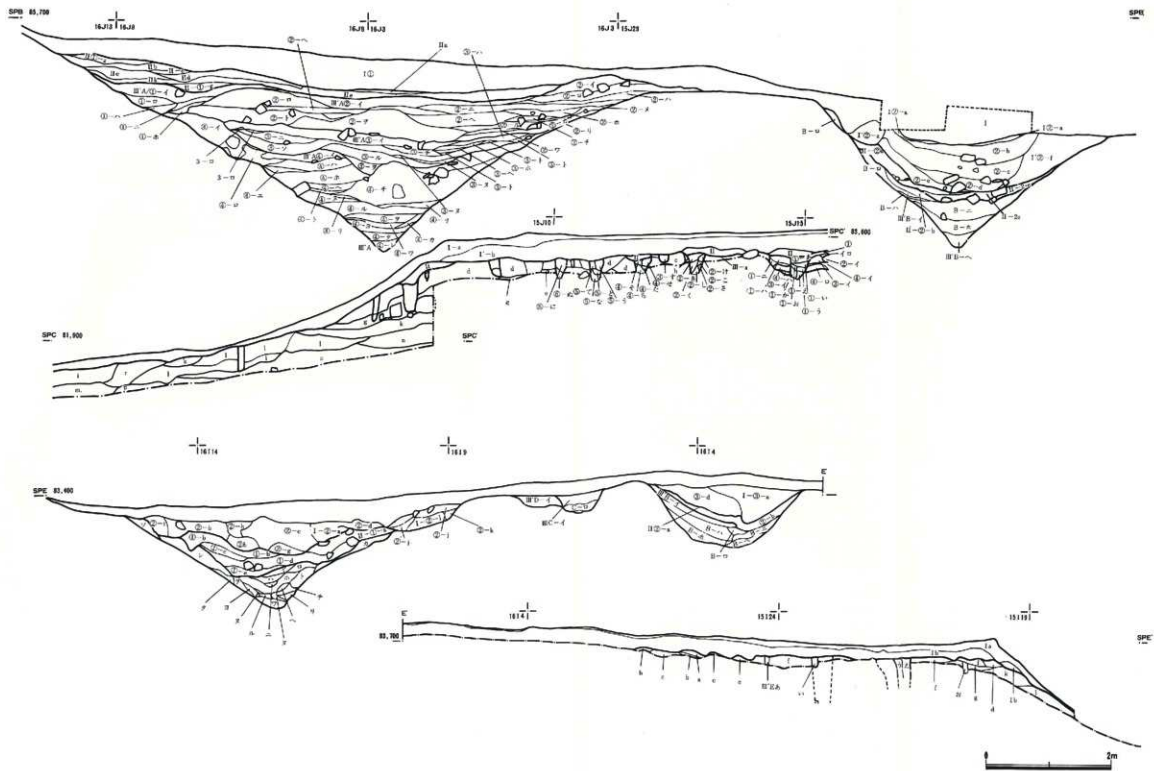
外側のBは巾2.5-4.7m、深さ1.1-2.2m。南東端は水松が生えている為掘り切っていないかほぼAと併走し、宮ノ沢に切り落とされると思われる。両側は礫混りの粘土層である。中央付近がAと同様やや低い。又中央より半分は底巾10cmと断面が逆三角形であるが、東半は90cmと広くなり角の丸いU字状となる。

AとBの前後関係については層序の項でも述べたが確実に断定し得るものはない。

### (4) 柱列 (第7図)

空壕Aの調査区北東端、壕の最も深い部分の両側面に対をなし8個の柱穴が検出された。東側北端の柱間がやや短い西側の柱間からは194cm、6尺4寸等間が求められ、又東西に壕をわたす距離は424cm、14尺である。柱穴の深さは70-100cm、柱穴掘り方の上場は50×60cm前後、柱痕跡の上場は15×20cm前後で、ほぼ垂直である。尚中央の調査で確認しなければならぬが、西斜面北端の状況からはこの8個一組で完結するものようである。又、この柱穴列の東西が若干平坦に削られており、特にその東側は溝状の浅い凹みになっている。

やや軟質の岩盤とはいえ、こうした大きく深い掘り方を持ちたい柱を立てる遺構は何であろうか。西は5m余の高さの急斜面が迫り、第二平坦面と連続させるにはそれだけの高さを必要とする。又垂直にたてた時の第二平坦面端部との水平距離は8m余であり、そこに楯列の断続はない(只、楯



第6图 空城跡・河北平担部土层图

表3 16J13、8、3、15J23北壁土層観察表①

層番号	小区分	層 別	色 調		組 成	備 考	
			主色 (notation)	土 色 名			
I	①	a		黄土 (暗黄褐)			
		b	10Y R/2, N, N	* (黄褐)			
		c	7.5Y R/2, N, N	明黄褐	砂粒が多量に含まれる		
		d	10Y R/2, N, N	に濃い黄	砂粒が少なく粘性強い		
		e	10Y R/2, N, N	明黄褐	主に粘土質の砂粒が多量に含まれる	●に類似する	
		f	10Y R/2, N, N	に濃い黄褐	砂粒が少なく、粘土質が主体	●に類似する	
	II	①	g	10Y R/2, N, N	に濃い黄褐	黄色砂粒を含まないソフト	
			h	*	*	粘土より砂粒つよく砂粒も少ない	
			i	*	*	粘土より砂粒が少なくしまっている	
			j	*	*	砂粒の混入がほとんどなく、粘性強い	
k			*	*		●に類似する	
l			*	*		●に類似する	
②		m	10Y R/2, N	灰黄褐	炭化物を若干含む		
		n	*	*	●よりさらに粘性を帯びやがちな		
		o	*	*	●より炭化物が多い	ソフト	
		p	*	*			
III	①	イ	*	に濃い黄褐	粘土粒と砂粒が混在して全体にしまっている		
		ロ	*	*		●に類似する	
		ハ	*	*		●に類似する	
		ニ	*	*	砂粒が全体でザラつく		
		ホ	*	*	暗褐色土が多く含まれる	ソフト	
		ヘ	*	*			
	②	イ	10Y R/2, N, N	明黄褐	粘性を帯びしまっている		
		ロ	*	*	黄色砂粒、塵等が多く含まれる		
		ハ	*	*	砂粒が多量に粘性強い		
		ニ	*	*	砂粒が多い	ソフト	
		ホ	*	*		●に類似する	
		ヘ	*	*	●より砂粒が少なく、粘性強い	●に類似する	
		ト	*	*		●に類似する	
		チ	*	*		●に類似する	
	③	イ	*	*		●に類似する	
		ロ	10Y R/2, N, N	灰黄褐	砂粒、暗褐色が多量に混入		
		ハ	*	*	暗褐色土が多い	粘い	
		ニ	*	*	●より黄色砂粒多い	粘強い	
		ホ	*	*	砂粒より暗褐色土が多い	粘い	
		ヘ	*	*	黄色砂粒が多くザラつく	ソフト	
④	イ	*	*	●より砂粒が多い	●に類似する		
	ロ	*	*		●に類似する		
	ハ	*	*	粘い砂粒が更に混入			
	ニ	*	*		●に類似する		
	ホ	*	*		●に類似する		
	ヘ	*	*		●に類似する		
	ト	*	*		●に類似する		
	チ	*	*		●に類似する		
	リ	*	*		●に類似する		
	ヌ	*	*		●に類似する		
	フ	*	*		●に類似する		
	ク	*	*		●に類似する		
	ケ	*	*		●に類似する		
	コ	*	*		●に類似する		
カ	*	*		●に類似する			
ク	*	*		●に類似する			
コ	10Y R/2, N, N	に濃い黄褐	小礫、砂粒が主体になるがしまっている				
カ	*	*	灰褐色土が若干混入し、やや粘性あり				
ク	*	*	●よりさらに粘性あり				
コ	*	*	小礫が多量に含まれる				
カ	*	*	小礫より砂粒が多量にしまっている				
ク	*	*	礫 (人前大) が多量に含まれる	●に類似する			
コ	*	*	粘土粒が多量にしまっている				
カ	*	*		●に類似する			
ク	*	*		●に類似する			
コ	*	*		●に類似する			
カ	*	*		●に類似する			
ク	*	*		●に類似する			
コ	*	*		●に類似する			
カ	*	*		●に類似する			
ク	*	*		●に類似する			
コ	10Y R/2, N, N, N	暗褐色土	粘りつよくしまっている				

表3 16J13、8、3、15J23北盤土層観察表②

層番号	小区分	層別	色		組成	備考
			JIS notation	土色名		
II		a	10Y R/2, 5/1	暗黄褐色土	砂礫が多く含む粘り強くない 砂礫が少なく粘り強い 細い砂礫と粘土粒の混合で 粘り強くない より粘り強くない より粘り強い	ソフト
		b	10Y R/2, 5/1	黄褐色土		
		c	10Y R/2, 5/1	土に黄褐色土		
		d	10Y R/2, 5/1	褐色土		
		e	*	*		
		f	10Y R/2, 5/1	12.5Y 黄褐色土		
		g	*	*		

表4 16I14~15I19北盤土層観察表①

層番号	小区分	層別	色		組成	備考
			JIS notation	土色名		
I	①	a	10Y R/2	褐	黄土色基盤層にケム基盤粒、炭化物混入	基盤
		b	10Y R/2, 10R/3, 7.5Y R/2, 7.5Y R/2	褐、暗赤褐、暗褐	基盤層10%	
		c	10Y R/2, 5/1	黄褐	3%以下の基盤粒 炭化物	基盤
		d	10Y R/2	褐	2%以下の基盤粒 炭化物	*
		e	10Y R/2	*	炭化物10%	炭粒
		f	10Y R/2, 7.5Y R/2	*	基盤粒混入	
		g	10Y R/2	*	シルト	
	②	a	10Y R/2, 5/1	黄褐、褐	2%以下基盤粒混入	基盤
		b	10Y R/2	褐	1%以下 *	*
		c	7.5Y R/2	*	基盤粒混入 シルト	
		d	7.5Y R/2	*	2%以下基盤粒、炭化物混入	
		e	7.5Y R	暗褐	シルト 2%、下基盤粒混入、シルト	
		f	10Y R/2	褐	5%以下基盤粒	
		g	10Y R/2	黄	7% 基盤粒 炭化物	
II	①	a	10Y R/2	暗褐	シルト	
		b	10Y R/2, 5/1	褐、暗褐	ローム基盤粒 混入	
		c	10Y R/2, 5/1	黄褐、暗	ローム基盤粒	岩、基盤
	②	d	10Y R/2	暗褐	火山灰層内に混入 シルト	ソフト
		e	10Y R/2	暗褐	火山灰、炭化物混入	
		f	7.5Y R/2, 10Y R/2	暗褐、褐	炭化物含有、粘り強、シルト	
III		a	7.5Y R/2, 10Y R/2	暗褐、褐	炭化物基盤粒含有、粘り強、シルト	
		b	7.5Y R/2	暗褐	0.5 ~ 2%基盤粒含有 5%	やや軟
		c	7.5Y R/2	暗褐	3%以下基盤粒 20%炭化物含有	
		d	7.5Y R/2	暗褐	8%黄褐色基盤粒炭化物、火山灰含有シルト	
		e	10Y R/2	暗褐	基盤粒混入	粗
		f	7.5Y R/2	*	黄緑褐色基盤粒10%	粗
		g	10Y R/2	*	炭粒細色基盤粒、ロームアロウ混入	炭粒
		h	10Y R/2	黄褐	基盤粒混入	小さい
		i	5Y R/2	赤褐	基盤粒炭化物混入	やや軟
III A		a	10Y R/2	褐	基盤粒層、炭化物含有	粗
		b	7.5Y R/2	*	*	*
		c	7.5Y R/2~5/1	土に黄褐、褐	砂礫	
		d	*	*	砂礫層 1.1リ	
		e	7.5Y R/2	暗褐	1%以下基盤粒混入火山灰混入	粗
		f	7.5Y R/2, 5/1	黄	*	
		g	7.5Y R/2, 10Y R/2	暗褐	1.3リ以下基盤粒混入 砂状土層	
		h	7.5Y R/2	暗褐	2%以下基盤粒層 火山灰混入	
		i	10Y R/2	暗	1%基盤粒混入暗褐色粘り強	
		j	7.5Y R/2, 5/1	暗褐	基盤粒 火山灰混入シルト	
		k	7.5Y R/2, 5/1	*	基盤粒 2%以下混入 砂状層	細く粗
		l	10Y R/2	暗	基盤粒10%	
		m	10Y R/2, 7.5Y R/2	暗	7%土層層10% 5.1リ以下粘り強粘り強層	
n	10Y R/2	暗	3.3リ以下基盤粒混入	粗		
o	7.5Y R/2	黄褐	5.1リ *			
p	10Y R/2	暗	6.1リ以下基盤粒混入 基盤粒	粗い		
q	*	*	*	*		
r	7.5Y R/2	暗褐	基盤粒混入層 炭化物混入	炭粒		

表4 16 | 14~15 | 19北壁土層観察表②

層 号		色		土 質		地 成		備 考	
断面層序	小区分	層 別	JIS color	土 色	土 質	地 成	地 成	備 考	備 考
ⅡB		イ	7.5Y R/5	明焼	明焼	明焼 シルト		イより明 赤 部 赤磁片	
		ロ	7.5Y R/5~R/6	暗、明焼	暗、明焼	シルト			
		ハ	7.5Y R/5	明焼	明焼	団粒状シルト			
		ニ	7.5Y R/5	×	×	炭化物 基盤塊 20以下混入			
		ホ	7.5Y R/5	×	×	炭化物混入シルト			
ⅡC		イ	×	×	×	炭化物粘り層混入		明焼 赤 イより中やソフト 明焼	
		ロ	7.5Y R/5 左	暗、明焼	暗、明焼	×			
ⅡD		イ	10Y R/5	焼	焼	30以下基盤塊混入		明焼	
		ロ	7.5Y R/5	焼	焼	シルト			
ⅡE		①	あ	7.5Y R/5	焼	×		あより中や硬い	
		②	い	7.5Y R/5	×	×			
		③	う	7.5Y R/5	×	×	基盤塊、炭化物混入		
		④	え	7.5Y R/5	にぶい塊	×	ツツ		柱礎跡
ⅡF		⑤	お	7.5Y R/5	焼	×	基盤塊混入		
		⑥	か	7.5Y R/5	焼	×	基盤塊混入		

列の内側の追求を行っていないことは先述した)。第二平坦面と連続させると第一平坦面とは連続出来ず、又その逆でもあられる。前後の平坦面から独立した施設の可能性が高いようである。現時点ではこれ以上の推測は困難であり、壕北半及び中央部分の調査結果を併せて検討することとした。

空壕Bの西側で壕に沿って小柱穴列が検出された。中央付近をはじめ所々間隔があく。中央南の土坑(墓)群付近は重複のため検出できなかったのかも知れない。又北端にいくに従い空壕Bから離れるようである。土坑との接近(重複?)は形成時期差を示すとも推される。空壕Bとの位置関係にも同様の事が言えよう。これらについても又、壕の中央及び北半の調査の結果を併せて検討することとした。

尚、土坑(墓)群西のピット群は必ずしも柱穴とは確認できなかったものである。

#### (5) 出土遺物 (P.L. 14~19)

陶磁器、鉄・銅製品、木製品、石製品他が出土した。

前項で述べたがこの空壕跡出土遺物の殆んどは第二平坦面からの流入であり本来第二平坦面の遺構を検討する資料となるものと思われる。

##### a 陶磁器

青磁、白磁、染付、赤絵、瀬戸・美濃灰、鉄釉、唐津、越前、珠洲系等の碗、皿、杯、盤、権鉢、壺、壺類が出土する。他に攪文土器類6片と縄文時代の遺物がある。

青磁：無文端反り碗、盤、線描き蓮弁碗、稜花皿等がある。

白磁：丸碗、端反り皿、輪花皿、小坏等がある。

端反り陶質の皿に漆で接いだものがある。又P.L. 14-65は器体が厚く高台以下無釉となるものである。

染付：口縁端反りの碗、蓮子型碗、端反り皿、巻筒底丸皿、小坏がある。碗には28、32等の高台の大きなものも見られる。又端反り皿に梵字文を描く例がある。

瀬戸・美濃：灰釉は無文と剣先蓮弁の碗、端反り、丸皿、盤皿等がある。端反り皿は中型のものも出土する。又胴部以下無釉となる皿がある。皿の内外面が火熱を受け、見込に溶融物の付着するものがある。他への転用であろうか。<sup>21)</sup>

鉄釉は碗と皿である。碗は口縁部が僅かに括れる輪高台で高台脇の削り巾の狭い類が多い。他に一段括れ内反りの高台を持つと推されるもの(15-47)、全体に低平な碗などがある。50の高台脇の削りは殆んど巾を持たない。皿は輪高台で腰部以下露胎の腰折皿の同一個体4片である。

権鉢：越前系、瀬戸・美濃(15-54)がある。壺・壺類は越前系、珠洲系(19-24)である。19-28は内面輪軸整形痕の残る備前系の袋物かと推される。

##### b 金属製品

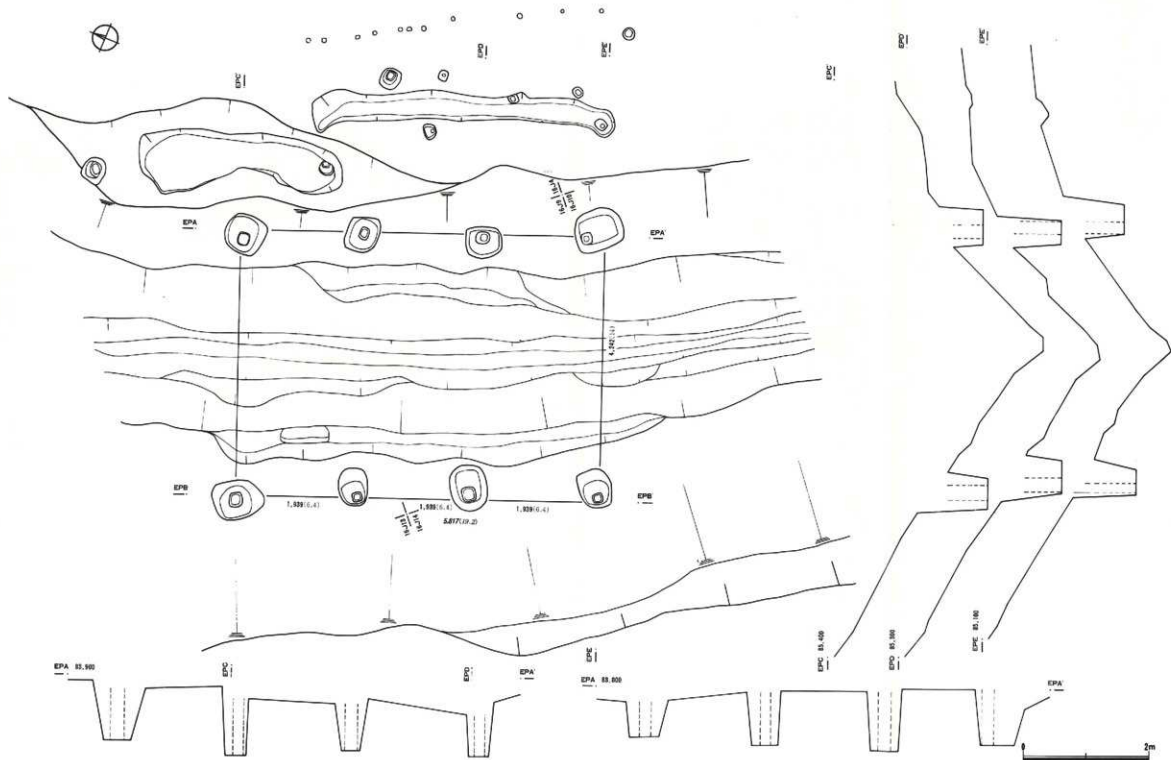
鉄、銅製品がある。(P.L. 16, 19)

鉄製品：鉄鍋、釘、小札、茶釜等である。鉄鍋は2及び3穴の吊耳のものがある。内耳については不明である。52は柱穴列東溝状の凹みから出土した。一端が角で鋭い形跡があり他端は偏平に尖るようである。タガネのようなものか。49は扇形、断面三角形で形状は斧に似る。刃部にあたる部分は、衝撃により凹凸を呈す。他端に欠矢の形跡はなく若干の凹みと肥厚を呈すが、柄を装着するようにはなっていない。56は底面が直角に近

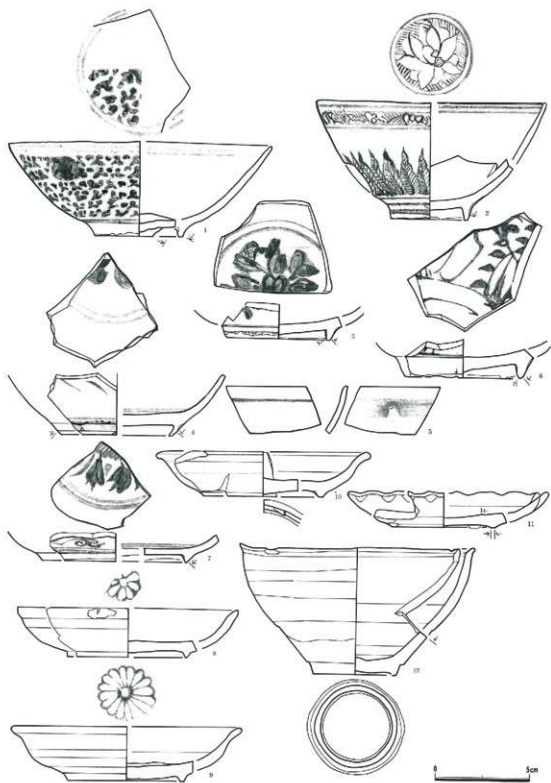


表5 15J5、10、15南壁土層観察表

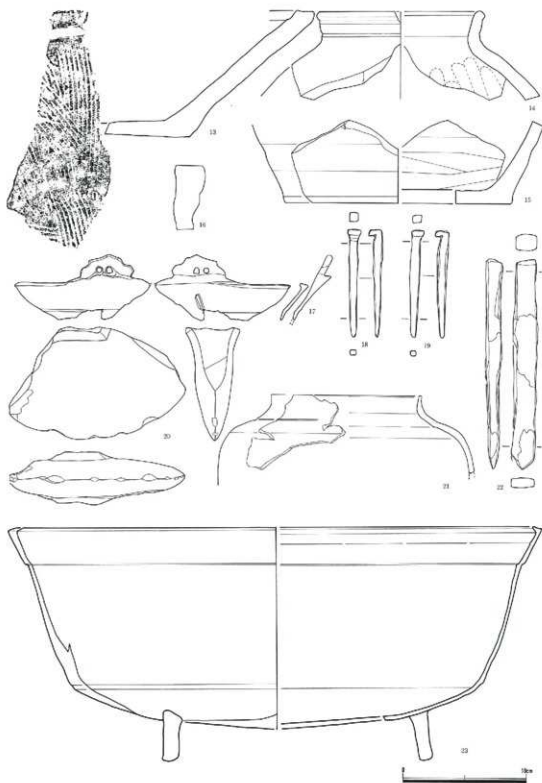
層		色		調		組	成	備	考	
基本層序	小区分	層	別	JIS notation	土色名					
I	a			7.5Y R/5-N	褐	シルト		腐植質含有	ソフト	
	b			7.5Y R/5	*	腐植質含有			かたくしまる	
II	a			7.5Y R/5, 10Y R/5, N	褐, に近い黄褐	腐植質・粘・炭化物混入			密かたくしまる	
	b			10Y R/5	に近い黄褐	腐植質粘混入 シルト				
	c			7.5Y R/5, 10Y R/5	褐, 暗褐	腐植質・粘・炭化物混入シルト			密かたくしまる	
	d			7.5Y R/5, N, 10Y R/5, N	褐	腐植質・粘・炭化物混入			かたくしまる	
	e			7.5Y R/5	*	腐植質・粘混入			かたくしまる	
	f			10Y R/5	*	腐植質粘含有			粗粒い	
	g			10Y R/5, N	褐色	腐植質粘土多量混入粘土粘含有				
	h									
	i			10Y R/5, N, N	明褐色	腐植質粘混入 粘土粘少量含有				
	j			10Y R/5, N, N	明褐色	小礫少量混入 粘質			やや中やソフト	
	k			10Y R/5, N, N	明褐色	小礫少量混入 粘質			やや中や硬くソフト	
	l			10Y R/5, N, N	明褐色	小礫少量混入粘性質				
	m			10Y R/5, N, N	明褐色	粘粒			しまる	
	n			10Y R/5, N, N	に近い黄褐色土	腐植質粘多量混入				
o			10Y R/5, N, N	*	粘土・フロック多量含有			やや中や粗粒い		
p			10Y R/5, N	黄褐色土	腐植質混入			しまる		
III	①	e		10Y R/5	褐	5φ以下赤鉄粉粘土粘含有			赤, かたい(赤3号型黄土)	
		f		7.5Y R/5-10Y R/5	暗褐, 黒褐	シルト				
		g		10Y R/5	暗褐	腐植質, 粘土粘混入 シルト				
		h		7.5Y R/5	*	粘土粘多量混入 シルト			やや粗粒い	
	②	e		7.5Y R/5, 10Y R/5	黄褐	2-3φ黄色腐植粘2φ以下粘混層含有			やや粗粒い	
	③	e		10Y R/5-N	黄, 黄褐	炭化付着体 シルト				
IV	④	e		7.5Y R/5	黄褐	3φ以下赤鉄粉, 粘土粘炭化付含有			イより粗い	
		f		5Y R/5	*	*				
		g		2.5Y R/5	暗赤褐	粘土粘多量混入				
	⑤	a			7.5Y R/5	暗褐	粘粒, 粘土粘, 炭化物含有			密
		b			7.5Y R/5	黄褐	炭化物, 粘土粘含有			やや粗
		c			7.5Y R/5	暗黄褐	粘粒, 炭化物含有			かたい
		d			7.5Y R/5-N	暗褐	粘土粘, 炭化物含有			
		e			7.5Y R/5-N	褐, 暗褐	粘粒			
		f			7.5Y R/5	褐	粘粒, 粘土粘, 炭化物含有			
	V	⑥	g		7.5Y R/5	*	腐植質・粘含有, 砂質 シルト			かたい
		h		7.5Y R/5	*	腐植質・粘, 粘土粘混入 粘質シルト			密	
		i		7.5Y R/5-N	*	2-3φ腐植土 粘質 シルト			密	
		j		7.5Y R/5	*	4φ腐 炭化物混入, シルト				
		k		10Y R/5	*	腐植質粘, 粘粒炭化物混入シルト				
		l		10Y R/5-N	*	1φ腐植質, 粘混入シルト				
⑦		g		7.5Y R/5	褐	腐植質少量混入ソフトシルト				
⑧		e			7.5Y R/5-N	に近い黄褐, 褐	腐植質粘混入シルト			かたい
		f			7.5Y R/5	褐	シルト			
		g			10Y R/5-N	暗黄褐	腐植質粘, 炭化物混入 シルト			かたい
		h			7.5Y R/5	褐	*			
⑨		g			10Y R/5	*	腐植質混入			かたくしまる密
		h			10Y R/5	*	シルト			
		i			7.5Y R/5	*	シルト			
	j			7.5Y R/5	*	粘 シルト				
⑩	i			7.5Y R/5	*	腐植質粘混入			かたい密	
	j			7.5Y R/5	*	腐植質粘少量混入 粘質シルト				
⑪	g			7.5Y R/5-N	*	腐植質粘少量混入 シルト				
	h			10Y R/5	*	腐植質粘少量混入, シルト			粘い密	



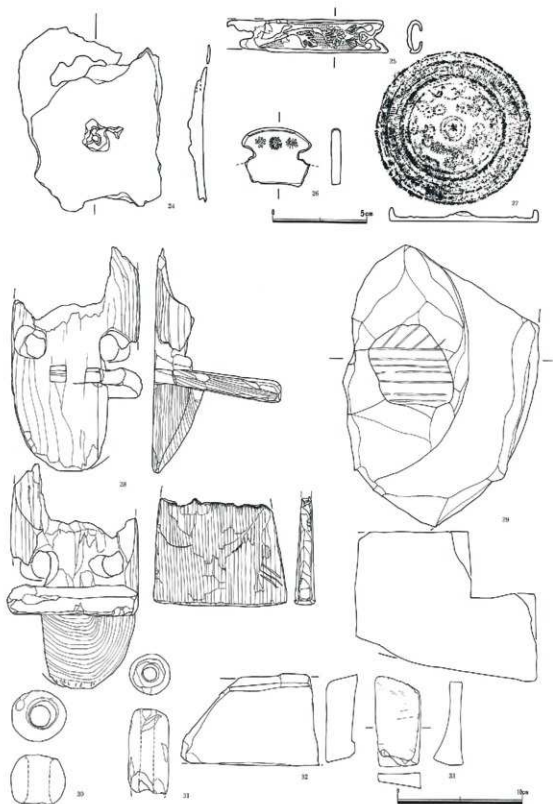
第7圖 空地跡柱列



第8図 空堀覆土出土遺物①



第9図 空塚覆土出土遺物②



第10図 空壕覆土出土遺物③

くつくられる大型の容器である。55、56は同一寸法の釘で未使用品かと思われる。一つの規格を示すものであろう。48は頸部が括れ、丸味を持って肩から下半にいたる。頸部に1条の微隆線がめぐる。茶釜かと推するが銹化の故か器体が薄く、下半の丸味も不足するようでもある。壺形の容器かも知れない。

銅製品：鏡、甲冑金物等である（P.L. 19）。

36は径7.7cmの鏡で「菊花双雀鏡」と称し得ようか。内区は銚座に珠紋帯を繞らせ、その上方に雀の「向鳥文」を配し、菊花を散らす。内区と外区は2mm別の界線で限られ、外帯には二重にやや斜行気味の櫛歯紋が廻り界線の内側には右下りの5個一単位の珠紋が8単位配される。18は八双金物で菊花が配され地は七子につくられる。29は厚さ5mm別の僅かに湾曲するもので一角に薄い把手状のものが作られる。中央が盛り上がる。仏具の一種であろうか。

c 木製品 下駄、折敷、箸、椀状のもの、木の皮、柱杭などが出土した。（P.L. 16）

2-7は箸の欠損品である。全体に面取りをし両端を更に細く削り出す。8-14は偏平な板（椀）状の木片である。厚さ2-3mm。12は特に薄く1mm程度である。15は折敷の底板。四隅を切り落し四辺中央に2個の穴がかけられる厚さ1mm弱。20は木の表皮を切断したものである。杉の植樹されていない膳山館の時期ではヒバの皮と推される。17は長円形の台に銀杏歯二枚を差し入れた露卯下駄で（高）足駄ともされる。欠損品の為、全長、前壺等は不明である。鼻緒の孔は内傾する。18はそれに詰めた木製のクサビである。太い方の木口は平坦になる。19は空塚に跨がる柱列の南西隅から出土した柱痕の残欠である。13cm程の巾を残しており一辺がこれを上回る角柱であったと推されよう。

d 石製品他（P.L. 16）

66は石臼（下臼）の半欠品である。凝灰岩質の軟らかみの石でつくられ受皿がつく。台底面は荒いノミ跡が残る削り上げられている。目は不明。欠損品ではあるが、臼の径は220mm前後と推される。P.L.20-1は鮫又海獣骨を素材にした骨角器である。基部を欠失する。基部は横長の多面体、中央偏円形、先端部偏平の断面形で中軸線に刺突部が作られる。稜線は明らかでない。ヤス等の刺突

具であろう。

58、59は鉄滓である。碗形鍛冶滓であろう。他に砂粒等を多く含む陶製羽口、陶甕等が出土している。

陶磁器は、茶入以外の殆どどの器種があり製品も同様であることは櫛列周辺と変りがない。又その年代も15世紀末-16世紀末の間のものが大部分である。

鉄製品のうち鍋類は破片が多く全体を推することが困難であるが、保存処理後に接合作業を進め再検討する予定である。

鏡は室町期前半に位置付けられるものであろう。かつて館内から八枚鏡の破片が採掘されているが本品は既出土の7面の中では幾分古いものであろう。

今迄数点の下駄が出土しているが露卯の（高）足駄ともされる本例ははじめての出土である。

受皿の付く石臼は茶臼とされるが、既出土の八分角安山岩のものが径180mm前後でつくりも丁寧であるのに比べると粗雑の感が強い。（松崎）

註）「るつば」としての使用も想定される。

#### (6) 土葬墓（第11回）

161 9区空塚Aと空塚Bの中間の平坦部にある。調査はN60°Eを基軸として4分法によることにした。その結果和釘、及び木棺の一部である木片・骨等が検出され、骨は加熱されていないので土葬墓である事が判明した。セクションS P A-A'によると南西及び北東の両側の柱穴が当土葬墓を切っており、柱穴の方が新しい事が判明した。また覆土12は木棺を納める際の微小基盤を主体とした整地盛土層である。10はシルト層。それより上部の層は10Y R 3/6-7のシルト+基盤礫+ロームブロックの混層であり再堆積の状況を呈していた。尚覆土をサンプリングしフローテーションも行なった。

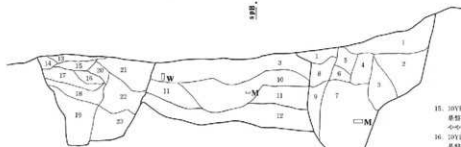
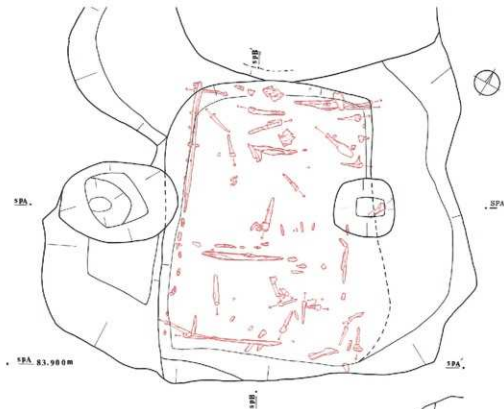
出土遺物

和釘、銅製品、陶磁器、骨が出土した。

和釘（第13図1-第18図29）

いずれも棺材の附着しているものであり特に南西側、南側では木質の残存状況が良く横板の一部が残っていた。折釘、切釘、さっば釘の3種類が使用されていた。

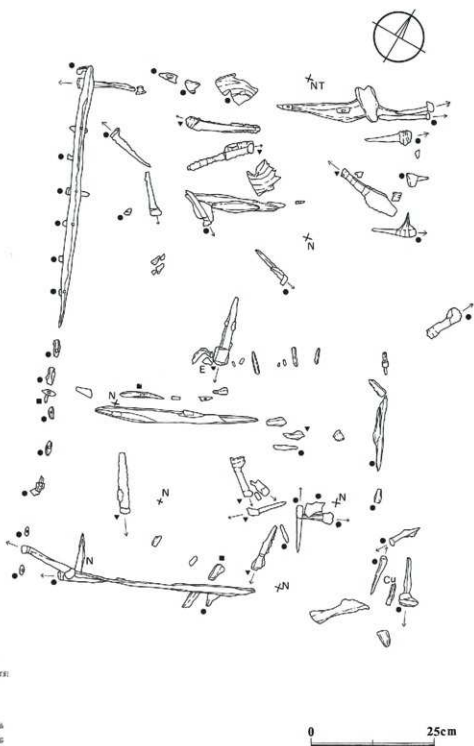
折釘（第13図1-19、第14図20-31、第15図32-42、第16図43）



- |   |  |   |  |  |
|---|--|---|--|--|
| <p>1. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>10YR5/2に10%黄褐色シロト<br/>基盤地10%<br/>密・明灰</p> <p>2. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地10%<br/>2よりやや明るい。</p> <p>3. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地10%<br/>2よりやや明るい。</p> | <p>4. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地10%<br/>2よりやや暗い。</p> <p>5. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地10%<br/>4と暗さ同だが若干暗い<br/>やや暗</p> <p>6. 基盤地: 大粒径2cm<br/>10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>やや暗</p> | <p>7. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地: 稀少10%<br/>やや暗</p> <p>8. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地: 全量<br/>密<br/>2に比し暗が(人)多い</p> <p>9. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地: 10%<br/>やや暗</p> | <p>11. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地: 稀少10%<br/>やや暗<br/>2より若干暗</p> <p>12. 基盤地<br/>稀少黄褐色<br/>密</p> <p>13. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>40%<br/>+ 基盤地: 60%<br/>密<br/>2</p> <p>14. 基盤地:<br/>三角砂<br/>密、明灰</p> | <p>17. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地: 稀少<br/>やや暗</p> <p>18. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>基盤地: 10%<br/>+ 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>+ 基盤地: 稀少<br/>密</p> <p>19. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>40%<br/>+ 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>+ 基盤地: 稀少<br/>密、明灰</p> <p>20. 10YR5/2に20%黄褐色シロト<br/>+ 基盤地: 稀少<br/>密、明灰</p> |
|---|--|---|--|--|

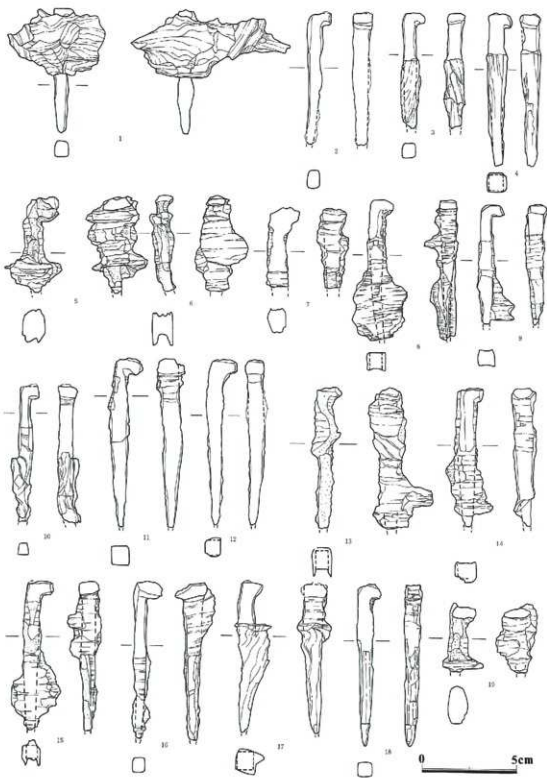


第11図 土墳墓 (平面図、セクション図)

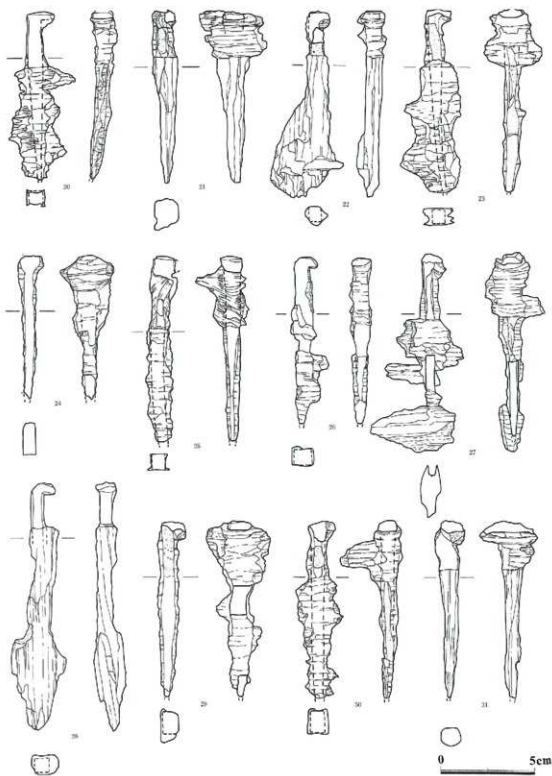


第12図 土埴墓遺物分布状況（釘・その他）

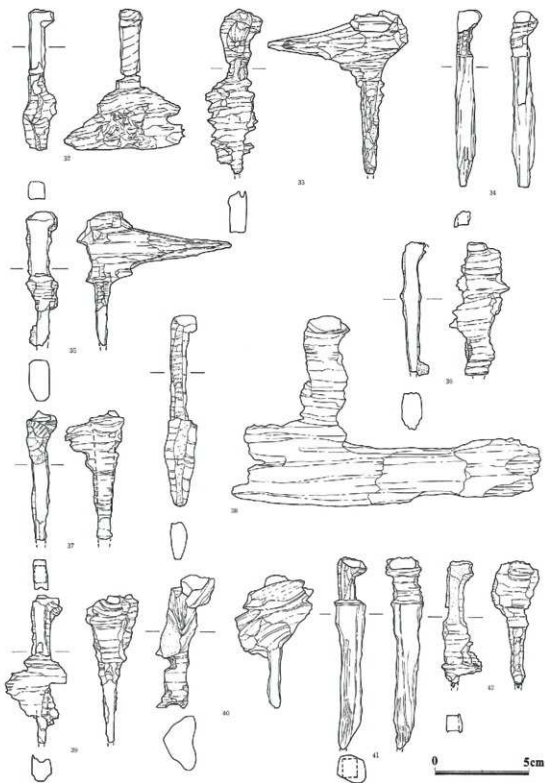




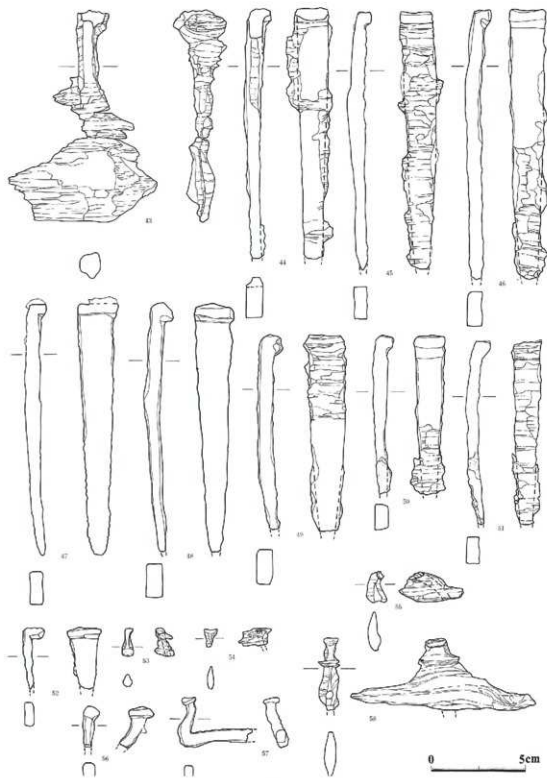
第13圖 土坑墓出土遺物(釘)



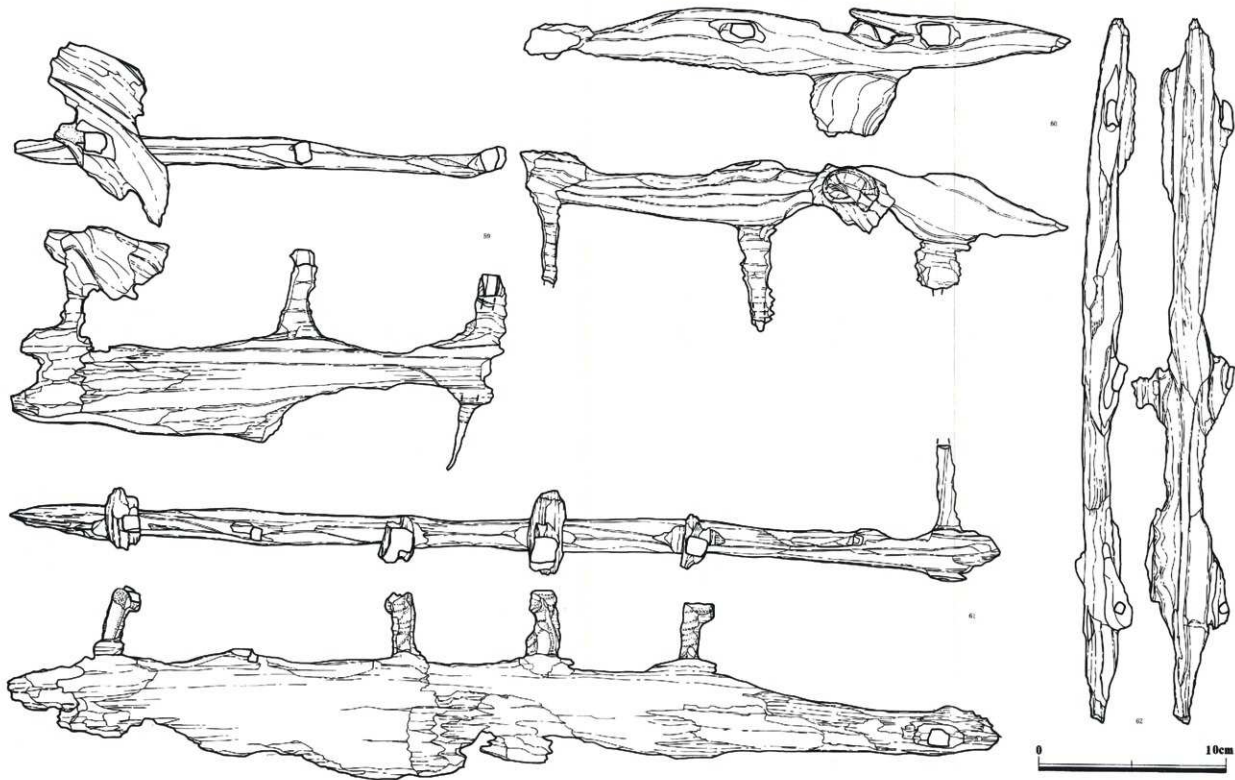
第14図 土塚墓出土遺物(釘)



第15图 土坑墓出土遗物(釘)



第16圖 土塚墓出土遺物(針)



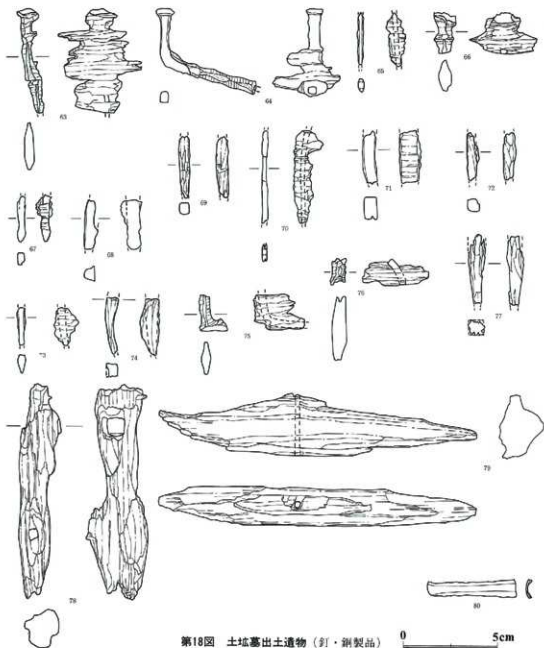
第17回 土坑墓出土遺物 (81)

切釘の基部及び上部を折り曲げる事により頭部  
 を作出するものであり、基部と同じ太さで頭の曲  
 がった釘である。尚長さは脚部が欠損、基部は木  
 質が附着しておりいずれも基部中央幅推定寸法、  
 頭部寸法等を検討して推定長を出した。2寸5分  
 (第13図1、6) 3寸(第13図2~19、第14図20~  
 31)、3寸5分(第15図37、38、41、第16図43)そ  
 の他に寸法が3寸~3寸5分と考えられる第17図

59~62の棺材附着の折釘も含め計56本検出された。  
 さっぱ釘(第16図44~52)

基部の偏平な平釘の一種で頭部の曲がったもの  
 である。折釘よりも頭の折れが短かく小さい。3  
 寸5分(第16図50~52)、5寸(第16図44~49)の  
 2種計9本が検出された。3寸5分では基部の幅  
 が4分、5寸では6分程である。

切釘(第16図53~57、第18図64)



第18図 土墳墓出土遺物(釘・銅製品)

0 5cm

頭部つくり出しのない釘である。1寸(第16図53~55)、1寸5分(第16図56)、2寸5分(第16図57)八、3寸(第18図64)の4種計12本が検出された。尚第16図52は平折釘かさばり釘か不明である。その他は小破片の為種類は不明。

銅製品(第18図80)は用途・名称等は不明。その他美濃の陶か皿と思われるものが出土しているが小破片のため詳細は不明。さらに覆土及び最下部整地層のサンプリングをしフローテーションを行なった結果、覆土は総量53,425gに対し骨片1.4g、炭化物2.4g、鉄片6.8g、種子40g、釘細片13.5gが検出された。整地層は総量51,650gに対し木炭33g、種子20.9g、鉄片3.2g、木片1g検出された。

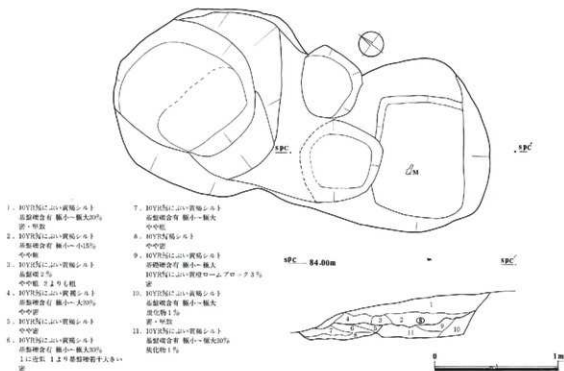
遺物の分布について(第12図)

全体に長方形の分布状況を呈しており、これが木棺の大きさとも考えられる。木棺は約100cm×80cm程である。和釘の分布状況をみると折釘は木棺の南西側長軸方向及び北西側、南東側短軸方向のそれぞれ外周部に分布する。特に南西側の52cm程の長さを有する木棺材(第17図61)では打ちつけられている折釘がすべて頭部が下になっている。つ

まり下から上へ打ちつけられている。尚その間隔は7cm程である。南西側の残りの折釘、北西側の折釘も同様に下から上へ打ちつけられている。また東側に若干分布する折釘は頭部が木棺の外側に向いており、棺内側へ向けて打ちつけられている。切釘、さばり釘は木棺の内部に散乱しているが、主に北西側と南東側にやや集中する傾向がある。骨は木棺内部に散乱している。歯は北西端、銅製品は南東端、陶磁器はほぼ中央部に位置する。

小棺

調査の結果墓基は110cm×90cmの隅丸方形を呈しN30°Wの方向に長軸をとる。深さはセクションによると33cm程であるが遺構確認等のため削平されており、掘りこみ当時は50~60cm程の深さがあったと考えられる。木棺は上述のとおり100cm×80cm程で墓壇底層の上に微小基盤礫を主体とした整地盛土層の上に置かれたと考えられる。木棺材の厚さは残存の木棺材等より1.5cm程である。また釘の分布より折釘は木棺の底部外周、及び横部分の外周に打ちこまれたと考えられる。さばり釘、切釘は棺の上部外周に打ち込まれていたものが長い年月の間に木棺が土圧によりつぶされ、木片と



第19図 土壇

ともに内部に散乱したと考えられる。これらより釘は種類により使う部位を変えていたと考えられる。また尚は北西隅にある事より頭位は北-北西方位と考えられる。

#### 土坑（第19図）

1619区にある。空壕Aと空壕Bの中間の平坦部に位置する。土葬墓より1.5m程北西にある。規模は長軸135cm×短軸推定110cm程である。土坑中央部より和釘の出土が見られる事、下端に方形の浅い掘りこみを有し、セクション観察では底部がフラットになっている事等より墓と考えられるセクション観察によると西側に隣接するピットに切られている。覆土（図5-8）にはすべて炭化物が入り9にロームブロックが入る。尚下端の方形の掘りこみが墓坑と考えられ、その規模は100cm×70cm程である。（斎藤）

### 3. 空壕東平坦面の遺構と遺物

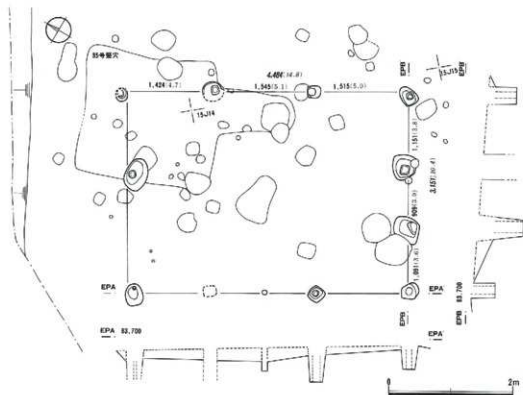
#### (1) 位置概要（第2図、付図）

第二平坦面と5mの段差を持つ第一平坦面は、幾分東へその長軸を寄せて広がっている。面積は約3,750<sup>2</sup>mである。中央を遊歩道が通り左右（南北）に各2-3段の小平坦面がつくられている。この第一平坦面右（南）の敷も西よりの小平坦面の二条の空壕の東側に遺構の形成が見られた。

空壕Bの東およそ2-3mのところに旧地表と思われる漆黒の面がある。この上に空壕の掘り上げ土を盛上り平坦面をつくる。遺構はこの盛土整地面につくられる。

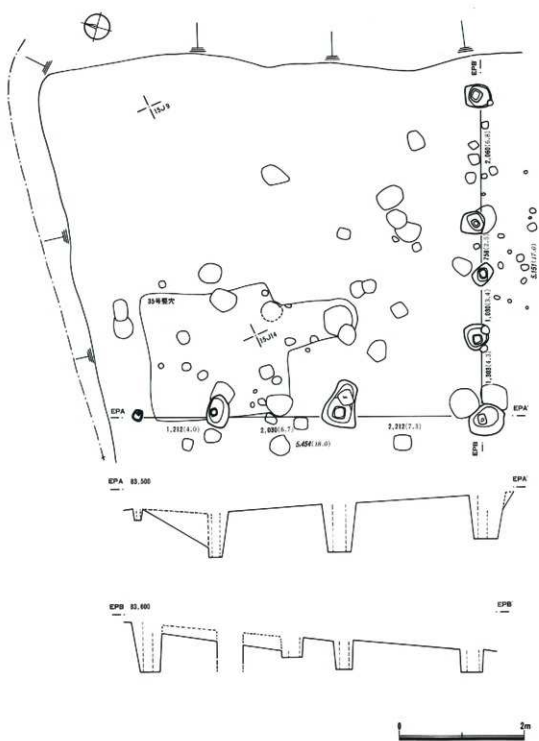
#### (2) 層序（第6図、表4、5）

盛土整直直前の旧地表面はIV a層として思っている（本概報Ⅸ）。このIV a層は空壕Bの東2m程からゆるやかに傾斜して、小平坦面の段直下、例

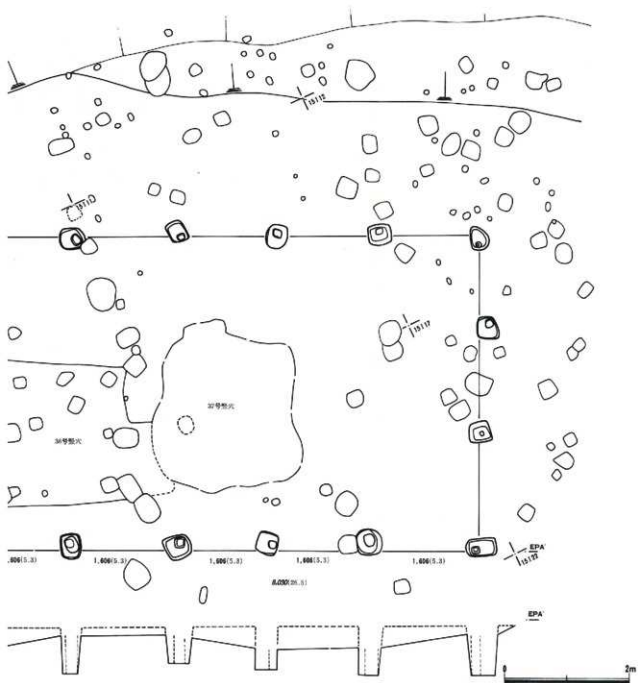


第20図 第1号建物跡想定図





第21図 第2号建物跡想定図



第22图 第3号建物跡想定图

えば15J10区中央のⅢa層下位に連なっている。又第二平坦面Ⅲ層下のⅣ層に連なる物である。従って、空壕跡東2mから第二平坦面層までの約24mの間は人為的に削られ、さらに空壕が掘られたものと推される(付図地形エレベーション網点部)。

この掘り上げ土の整地層がこの小平坦面をつくりそこに遺構が形成されている。この整地層がⅢ層でありその上位にⅡ層、Ⅰ層が堆積する(付図地形断面斜線部)。

### (3) 検出遺構

検出・想定された遺構は掘立柱建物跡と竪穴遺構である。遺構と遺物の相伴関係、焼土(後述)との相互関係等について充分検討することができなかったため、柱穴列等から想定されることを以下に概述することとした。

#### a. 掘立柱建物跡

**第1号建物跡**(第20図)：調査区南西端で検出した。35号竪穴と重複し、新しい。南及び東の柱列から3×3間の建物跡を想定したが、西及び北の柱穴対応は明瞭でない。南北約4.5、東西3.15m程である。柱間は約南北1.4~1.5m、東西90~1.15mを計る。面積14.13㎡。

**第2号建物跡**(第21図)：東と南に柱列が見いだされた。1号より新しい。北、西側の柱穴を検出できず、柱間も不揃いである。

1号建物跡は3~7号とした建物跡と輪線が揃わず、むしろ2号の柱列が同一方向になる。東、北部の調査が不十分な為検出できなかったと推されるが、この一面にも建物があつたと推される。

**第3号建物跡**(第22図)：小平坦面中央北寄り位置する。3間×5間の平坦地に沿った南北の建物。南北約8m、東西4.8m程で面積38.7㎡弱である。柱間1,605、1,606(5尺3寸)の等間となる。36、37号竪穴が中に入るが新旧関係は不明である。37号竪穴が未完掘に終り、その覆土或いは床面に柱穴が認められるようであり、調査結果によっては間取りや、新旧関係が判るか推される。

**第4号建物跡**(第23図)：小平坦面中央に位置する。3間×3間で平坦面に直行する東西棟となっている。東西5m、南北4m程、面積19.7㎡余である。柱間は東西1.7、1.7、1.6m、南北1.24~1.4mである。2×3間の南北棟とも推される。西柱列中央右の柱穴の重複関係だけ他と異なっている。

**第5号建物跡**(第24図)：小平坦面中央(南)

に位置する。3×3間の平坦面に併行する南北棟である。南北5.7m、東西4m、面積22.7㎡余である。柱間寸法は約127~137cm、170~200cmで定まらない。これも東西いずれかの1間を庇とする2×3間の建物とも推される。

**第6号建物跡**(第25図)：小平坦面南端に位置する。1間×2間の小さな建物である。2.2×3.2mで約7㎡の面積である。東西の柱間は北柱列では1.6m等間となるが、南側とは対応しない。周辺に焼土があるが南中央の大きめの焼土遺構や後述の出土遺物などから小規模な鍛冶関連遺構かと推される。

又南の六地へりに東西に検出された小柱穴列はこの小平坦面を限る柵(塀)状のものと推される。

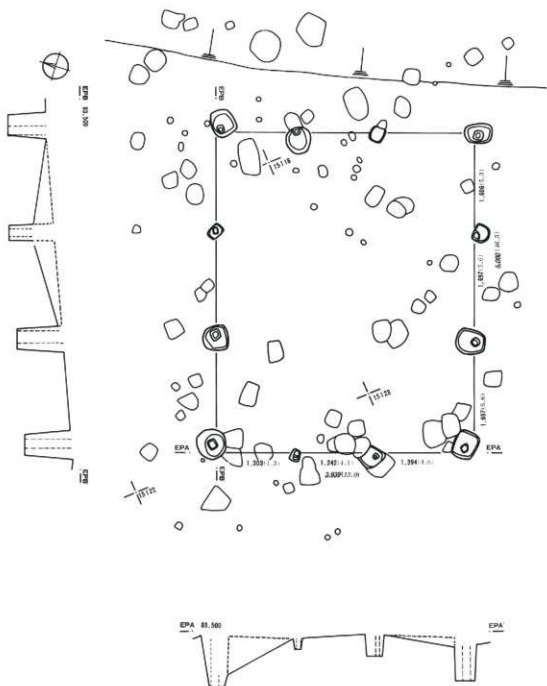
**第7号建物跡**(第25図)：小平坦面南端は鉤の手に西に曲がる。南西隅から南の段下を東に緩い坂が下っている。第一平坦面の最も広い区画に至るとともに南西に下り宮ノ沢を経て埴屋敷に至る道との分岐点に続いている。小平坦面の南を通過へ至る道路跡であろう。その造成は小平坦面同様、空壕掘り上げ土の整地によっている(土層堆積図省略)。

第7号建物跡としたのはこの坂のおかげで検出した柱穴から木戸等として想定したものである。その位置としてはより西側の傾斜する坂(道)の出発点がより速しているかと推される。巾2m弱である。

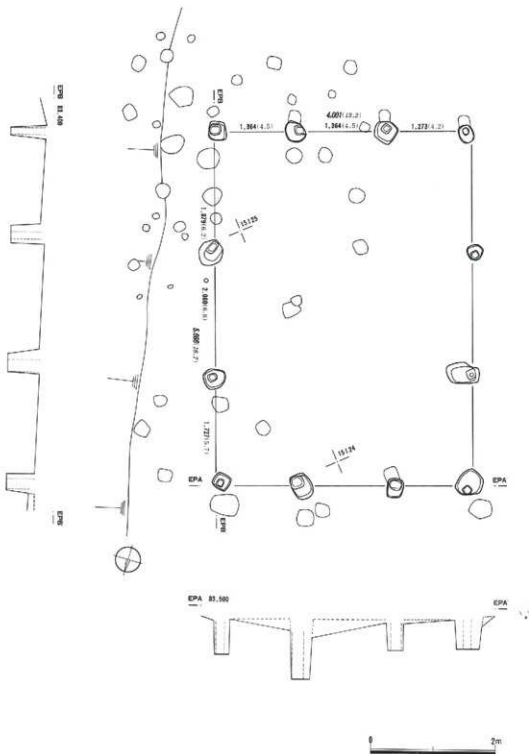
#### b. 竪穴遺構

小平坦面の北半で3基の竪穴が検出された。内36号竪穴は、62年度調査のトレンチ東端で一部検出されていたものである。又、37号竪穴は焼土家屋であったが実測図の作成途中のまま調査を中断、完掘にいたってない。又個々の竪穴覆土出土の遺物についても充分な検討ができず、相伴関係は明確でない。

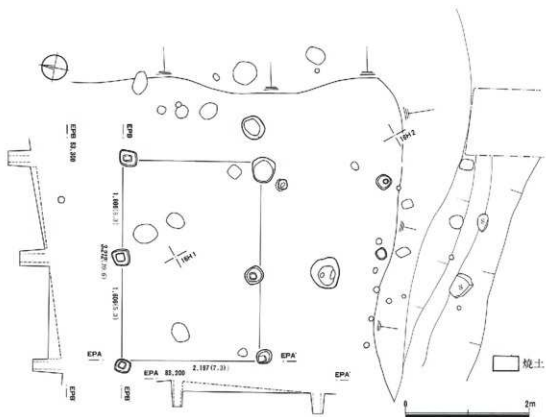
**35号竪穴遺構**(第26図)：小平坦面北端で検出された。一辺が2m程の方形で南側東半に1m弱の緩やかな傾斜を持つ張り出しがつく。北側の壁高76cm。Ⅲ層整地層を掘り込み面とする。覆土の堆積は、壁際に一次堆積が若干見られるが、基盤礫、粒を含むⅢA層が厚く1号建物跡の柱穴が覆土を掘り込んでいる事などから人為的に埋められていると解される。尚、底面直上に黒色の灰泥じりの層が薄く堆積していた。



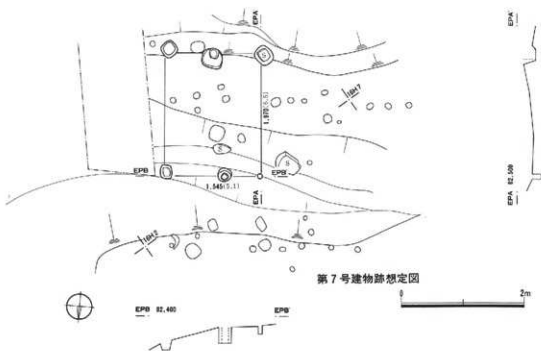
第23図 第4号建物跡想定図



第24图 第5号建物跡想定図



第6号建物跡想定図

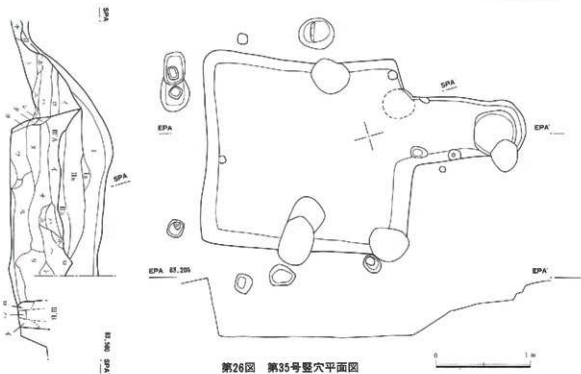


第7号建物跡想定図

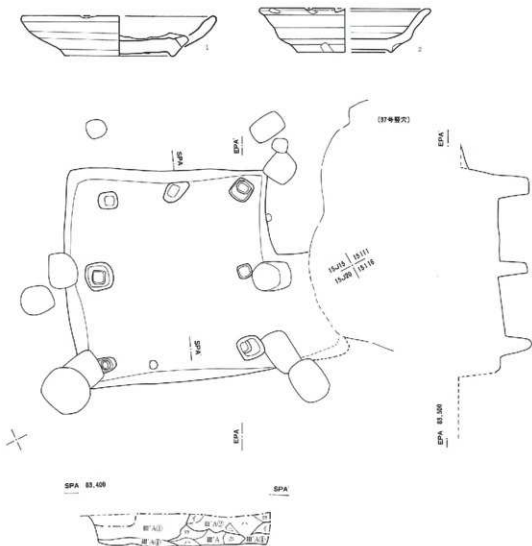
第25図 第6・第7号建物跡想定図

表6 第35号竖穴覆土土層観察表

層番号	小区分	層別	色		土 色 名	組 成	備 考
			JIS	soil color			
I		a					覆土
		b					かたい
		c	7.5Y R/2		細	500大礫混入5%	
II		a	10Y R/4		粗礫	炭化物混入 1%	ソフト
		b	7.5Y R/4		粗礫	※	※ 土よりやや明るく軟い
		c	10Y R/4		粗	基盤礫混入 シルト	
III		a	7.5Y R/4		粗	0.5-1000大基盤礫含有砂質	
		b	10Y R/4		粗	炭化物含有 シルト	
		c	2.5Y R/4		赤礫	800大基盤礫含有砂質	イより著
		d	7.5Y R/4		粗礫	炭化物含有 粘付き	
		e	10Y R/4		12.00-黄褐色	300大基盤礫混りロームブロック混入	
		f	10Y R/4		黒礫	炭化物粘土混含有 シルト	
		g	10Y R/4		黒	炭化物混入 シルト	
		h	10Y R/4		黒	基盤礫混入	
IV A		i	7.5Y R/4		12.00-黄褐色	基盤礫混、炭化物混入	堅く覆土(以下同)
		j	7.5Y R/4		粗礫	粘土粒混入20%	
		ka	10Y R/4		12.00-黄褐色	丸山珪石礫混入	ソフト
		kb	10Y R/4		※	炭化物混入シルト	
		kc	7.5Y R/4		粗	ロームブロック基盤礫混入	
		kd	10Y R/4		12.00-黄褐色	200大基盤礫混入炭化物混入	ソフト
		ke	10Y R/4		粗	炭化物基盤礫含有	かたい
		kf	10Y R/4		12.00-黄褐色	基盤礫 炭化物ローム混入	
		kg	10Y R/4		※	300大基盤礫混、炭化物混入	かたい
		kh	10Y R/4		※	基盤礫のローム粒 炭化物混入	著 かない
		ki	7.5Y R/4		※	1-300大基盤礫混、炭化物含有	著 かない
		kj	10Y R/4		※	200大礫炭化物含有	粗 ソフト
		kk	7.5Y R/4		※	ローム粒、炭化物混入、粘土層	著 かない
		kl	10Y R/4		※	500以下礫、炭化物混入 シルト	アより暗い
	km	10Y R/4		※	シルト	ソフト	
	kn	10Y R/4		※	500大礫、炭化物混入 シルト	ソフト	
IV B		la	7.5Y R/4		粗礫	基盤礫炭化物含有	柱状覆土
		lb	7.5Y R/4		粗	※	かたくしまる(堅礫)
		lc	7.5Y R/4		粗礫	※	



第26図 第35号竖穴平面図



第27図 第36号竪穴平面図・出土遺物

表7 36号竪穴覆土層観察表

基本層序	小区分	層 別	色		組 成	備 考
			JIS notation	土 色 名		
B/A	①	イ	10Y R/5	褐	300以上の黒粒、同粒層	粒、中粒・粗粒層・土層
		ロ	10Y R/5	*	黒粒層に炭化物含有	「イ」よりやや暗く粒々
	②	キ	7.5Y R/5	紅土・黄褐	炭化物含有（シルト）	粒々
		ク	7.5Y R/5	暗褐	黒粒層に炭化物含有（凝結性ありシルト）	
		コ	7.5Y R/5-6	暗褐	黒粒層に含有なし	粒々
	③	イ	7.5Y R/5	褐	同層に200粒、炭化物含有、黒粒、シルト	ソフト
		ロ	7.5Y R/5-6	* 暗褐	丸山系黒人層 凝性、ペースト状	ソフト
		ハ	7.5Y R/5	褐	黒粒層、丸山系含有	
		ニ	7.5Y R/5-6	* 暗褐	黒粒層、丸山系炭化物含有（シルト）	
		ホ	7.5Y R/5	*	500以上の黒粒、丸山系含有	
④	イ	7.5Y R/5	*	200以上の黒粒、粒含有		
	ロ	7.5Y R/5-6	*	黒粒層に 炭化物含有、凝、凝性（シルト）		



底面での柱穴、周溝等の検出はできなかった。張り出し部側方の小柱穴は本遺構に伴うかと推する。又遺構の周囲で柱穴が検出されたが竪穴との関係は明らかでない。底面はローム層であるが、それ程堅められてはいない。

覆土中から出土した遺物はない。底面直上の炭化物混入層中から漆器皮膜、鍛造刺片、魚骨が採集された（PL, 20）。

**36号竪穴遺構**（第27図）：小平坦面北半で検出された。2.3×2.1m程の方形で南西部に張り出しがつくと推される。壁高は62年度調査層序から50～65cm程である。掘り込み面はⅢ層整地層である。覆土は西半にやや軟かみの粒子の細かい層が堆積し、東半は礫混じりの堅い層となる（Ⅲ'A①）。後者は再堆積の埋め土と思われる。底面に炭化物等を含む薄い層が堆積する。

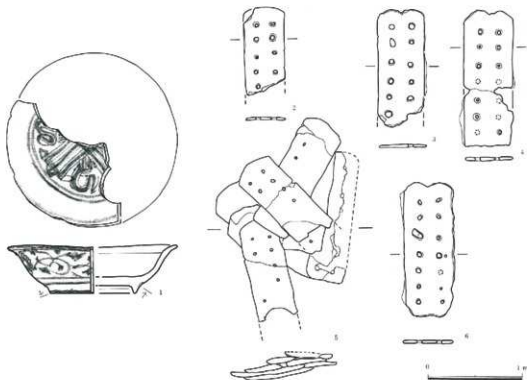
柱穴が7個検出されている。南張出部で37号竪穴と重複している。37号が未完掘であるが、37号の方が新しいかと推される。又3号建物跡との新旧関係も明らかでないが一応本竪穴が古いかと推している。底面は西半は基盤ローム層であるが東半はⅢ層盛土整地層であり、整えられた形跡はな

い。

覆土等から陶磁器等が出土した（PL, 18, 20）。11、12は竪穴西半の底面直上から出土した瀬戸・美濃灰釉碗で11には剣先蓮弁が描かれる。同一個体と推される。14（27図2）は東半の底面より下位及び遺構南のほぼ同一レベルより出土した瀬戸・美濃のやや小ぶりの端反りする丈高の皿である。8、9、13は竪穴覆土上半部からの出土であり、9は37号竪穴上部の他、周辺調査区のⅠ、Ⅱ層中からも出土する。又底面直上層より粒状滓、骨髄を抽出した。

14は本竪穴の掘り込まれる以前のⅢ層整地層中の遺物であり、11、12は、竪穴の使用時期或いは廃棄直後の近い時期にあたり、その他は埋没、整地後の遺物かと推される。11は大塚Ⅰ期であり、14もほぼ同時期と思われる。13の内はがしの丸皿は大塚のⅡ期以降の所産であろう。従って本竪穴は大塚Ⅰ期の遺物が使用されていた時期頃との推測が可能と思われる。

**37号竪穴**（附図、PL, 11）：小平坦面北半中央寄りで検出された。未完掘の為形状等は不詳。35、36号等と同様の方形を呈する。北東に張り出



第28図 第37号竪穴出土遺物

しがある。焼失埋没しており諸部材が残存する。又その上から柱穴が穿たれており、又下位にも柱穴の検出される可能性は高い。

部分的な観察であるが心材を面取りした主柱痕が8個、張出し部にも一部一回り細い柱痕が炭化して残る。主柱痕の外側に板材が横長に立って残りその外側に束状に禾本科植物がある。結縛はまだ明らかでない。内部の炭化材の下位、竪穴底面に近接して南北に細い材がわたされている。

計測、取り上げの途中でやや不確実であるが、鈴木亘先生のご教示によれば、柱外側の横板は壁であり禾本科植物は屋根又は壁（の補助）材であり南北に根太をわたした床張りの建物の可能性が高いとの事である。

炭化材の直上等で遺物が検出された（第28図、P.L. 18）。20点余りの小札、釘、鉄滓、粒状滓、陶磁器及び獣魚骨である。陶磁器は青磁投花皿、染付料磨皿、内湾気味の丸皿で外面に折枝を内面口縁に四方釋文を描くもの、瀬戸・美濃端反り皿である。小札は大小その他各種ある。他に握り拳大の碗形滓、内部の空洞化した溶解物等がある。

本小平坦面の遺物については後述するところであるがその位置関係等の分析は十分でなく、竪穴の性格等を探るにはまだ無理があるが各竪穴々々で（獣）魚骨が採集され、35、37号から鍛造剥片、36、37号から粒状滓<sup>④</sup>が抽出されるなど共通・関連性が窺われるところとなっている。（松崎）

註）この資料についての成分分析などが国立歴史民俗博物館で現在すすめられている。

#### c 焼土（第29図～第31図）

16基確認された。調査はいずれも半截しセクション図作成後覆土をサンプリングしフローテーションを行なった。（表8）。

**焼土1**（第29図SPA～SPA'）：15J9区にある。約37cm×30cm程の不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、炭化物等が微量含まれる。

**焼土2**（第29図SPB～SPB'）：15J9区にある。約25cm×21cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、炭化物等が微量に含まれる。

**焼土3**（第29図SPC～SPC'）：15J9区にある。約60cm×21cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、木炭、種子等が微

量含まれる。

**焼土4**（第30図SPD～SPD'）：15J9区にある。約160cm×94cmの不整形をなす。覆土中には魚骨、獣骨、木炭、種子が多量に含まれる。その他鉄製品の細片、漆器皮膜等も微量に含まれる。堆積状況より焼成面が明確でない事等より流れこみによるものと考えられる。

**焼土5**（第29図SPE～SPE'）：15J9区にある。約20cm×16cm程の不整形をなす。残存状態が悪く下部より残っていない。覆土中には魚骨、木炭が微量含まれる。

**焼土6**（第29図SPF～SPF'）：15J9区にある。約41cm×26cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には木炭、獣骨、種子が微量に含まれる。

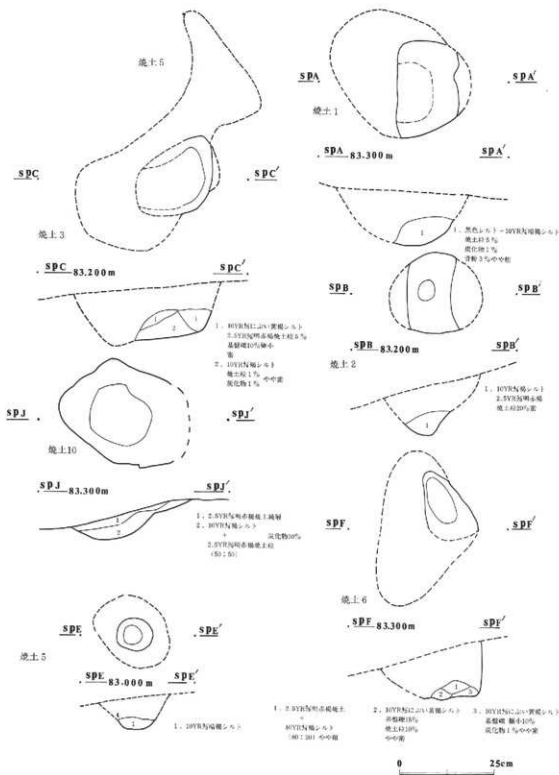
**焼土7**（第31図SPG～SPG'）：15J9区にある。約200cm×56cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、魚骨、木炭等が多量に含まれる。その他鍛造剥片微量、海獣骨製骨角器、フレーク、土器片等が含まれる。堆積状況より流れこみと考えられる。

**焼土8**（第31図SPH～SPH'）：15J14区にある。約40cm×33cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、魚骨、木炭が含まれる。堆積状況は図上1に焼成面と考えられる焼土純層があるが周囲の2、3、5には焼土粒、炭化物等が全く含まれない。流れこみによるものか、地床炉か不明である。尚当焼土内の礫は加熱されていない。

**焼土9**（第31図SPI～SPI'）：15J4区にある。約43cm×38cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、炭化物が含まれる。堆積状況より焼成面は1と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

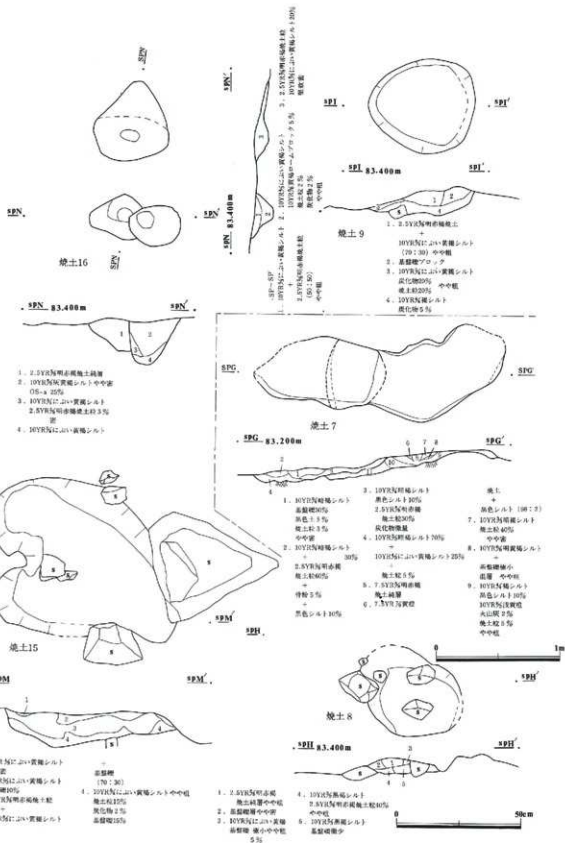
**焼土10**（第29図SPJ～SPJ'）：15J15区にある。約34cm×25cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、炭化物が含まれる。堆積状況より焼成面は1と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

**焼土11**（第30図SPK～SPK', SPL～L'）：15J11区にある。約61cm×59cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、魚骨、炭化物、木炭、鉄片、鍛造剥片等が含まれる。堆積状況より焼土純層の1、3、5が焼成面である事より当焼土は地床炉と考えられる。



第29図 焼土 ①





第31区 焼土③

**焼土12** (第30図SPK~SPK') : 15 I 11区にある。約22cm×17cmの不整形を呈する。覆土中には魚骨、木炭、炭化物、鉄片等が含まれる。堆積状況より8が焼土純層であり焼成面と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

**焼土13** (第30図SPK~K') : 15 I 16区にある。約20cm×24cmの不整形をなす。焼土12と隣接して入る。覆土中には魚骨、木炭、鉄製釣針が含まれる。覆土は焼土純層のみであり焼成面が極めてしっかりしている。従って当焼土は地床炉と考えられる。

**焼土14** (第30図SPL~SPL') : 15 I 16区にある。約25cm×17cmの不整形をなす。覆土中には魚骨、木炭、炭化物、種子が含まれる。覆土はシルト土壌と焼土粒の混合土であるが焼土粒が90%と多く焼成面と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

**焼土15** (第31図SPM~SPM') : 15 I 17区にある。約87cm×60cmの不整形をなす。覆土中には獸骨、魚骨、木炭、種子、鉄片、鉄細片が含まれ

る。セクションが中央部を横断していないので土層堆積状況は明瞭ではないが、図でみる限りでは焼成面は判然としなく、流れこみによる堆積と考えられる。尚当焼土周囲の礫は加熱されていない。

**焼土16** (第31図SPN~SPN') : 15 I 24区にある。柱穴との重複関係となっており当焼土が古い。覆土中には魚骨、木炭片が含まれる。覆土は焼土純層のみである。従って当焼土は地床炉と考えられる。

**傾向** 地域的には15 J 9、14区と15 I 11、16区の2つのブロックに集中する。覆土堆積状況では15 J 9、14区の焼土は流れこみ、不明のいずれかに対し15 I 11、16区は地床炉が多い。覆土中含有物、含有率は15 I 11、16区地床炉では獸骨、魚骨、木炭が多く種子は微量、鍛造鉄片、鉄滓は皆無である。また流れこみの焼土には骨角器、鉄、釘等が含まれていた。これらより地床炉の用途は建物に付属する炊爨用、暖房用としての用途と考えられる。(斉藤)

表 8 焼土成分表

焼土NO	グリット	サンプル 総量(g)	成							分(%)		
			炭化物	木炭	種子	骨	貝	鉄	鍛造鉄片	鉄滓	備	考
1	15 J 9	4455	1.0		6.9	1.3						
2	15 J 9	2340	1.8			1.1						
3	15 J 9	3169			1.0	0.9	1.1					
4	15 J 9	200635		84.0	59.2	257.0	1.0	16.5	1.9	釘、漆器破片1.0、縄文土器片112.3、フレーク4.5		
5	15 J 9	793.7		1.9		1.0						
6	15 J 9	1875	0.1	3.0	1.8							
7	15 J 9	22230	12.5	13.4		10.1			1.1	骨角器2.1、縄文土器片19.9、フレーク1.25		
8	15 J 14	2360		5.0		2.0						
9	15 J 14	3540	4.8	11.2	4.6							
10	15 J 15	1820	1.3			1.4						
11	15 I 11	13960	1.7	7.6		9.8		1.9		鍛造鉄片1.2、フレーク3.4		
12	15 I 11	2625	1.2	1.1		2.5		1.0				
13	15 I 16	4690		4.0		3.0		1.9		釣針1.9、縄文土器片46.2、フレーク0.9		
14	15 I 11	9525	3.1	4.7	0.9	9.8						
15	15 I 17	22960		5.7	1.8	3.7		0.9		鉄1.0		
16	15 I 24	2320		1.2		1.4						

#### (4) 出土遺物 (第32回～34回)

空壕東側小平坦面から陶磁器、鉄、銅製品、石製品他が出土した。

a 陶磁器 (P.L. 17, 19-19, 21, 25, 26, 14-17)

青磁、白磁、染付、瀬戸・美濃、志野、唐津、越前、珠洲等が出土している。堅穴覆土も合せ234点が出土しているがうち170点程は北半に集中している。碗、皿類は北半に2.5～3.8倍集中するのに対し、檜鉢は南半に3倍集中し、南半における檜鉢の構成比が高くなっている(表9)。

青磁: 線描き蓮弁碗、桜花皿が出土する。4、22は内面に押印のある碗である。他に底部周辺が丸く磨り減り円盤状になったものがある(32図12)。当遺跡では3例目程である。

白磁: 皿と小瓶がある。19はやや青味がかった釉が厚めにかけられている。(3)。

染付: 蓮子碗、口縁内外に團縁の廻る碗、濁磨皿、茗筒底の皿などがある。6の獅子皿や28の端反り皿は当遺跡では新しい段階のものである。

瀬戸・美濃: 碗と皿が出土する。46は剣先蓮弁の碗、47は内はがしの丸皿である。49は口縁内外に黒く煤が付着し、口端が再加熱で白色化している。灯明皿としての仕様であろう。

54～58は鉄軸の碗である。当地区から僅か5片しか出土していないのは極だった特色である。

59は志野、60～62は唐津である。61は鉄絵が描かれる。志野・唐津ともに皿である。

他に越前、珠洲形の檜鉢、襷等が出土する。

b 金属製品 (P.L. 18, 19)

鉄製品: この小平坦面では3,243gが出土した。又、鉄滓が3,014.2gが出土している。大まかな傾向をみると1号及び2号建物跡(35号堅穴)周辺にそれぞれ、316.8, 98.7g、37号堅穴周辺に1,398.2, 562.6g、6号建物跡周辺に572.2gの量が集中して出土している。尚鉄の製品別等の量比較は未集計である。

P.L. 18-15～21は鉄鍋類の破片である。15は口縁下4.5cm程のところ段が着くもので口唇は内側に三角形に肥厚する。17は吊耳の部分、20は口縁部破片である。内側に肥厚する。18、19、21、は底部破片。19は大きく外開きする大型のものと推される。21は5cm程の脚が着く。16は高さ8cm程の浅い容器のようである。22、23は刀子、24も同

類であろう。27は鍔の茎かと推する。28は釣針である。軸の3分の1くらいまで、さきをまげ、軸とはほぼ平行させる。軸は上3分の2は偏平で上3分の1程は内側へまげられる。かえしの部分は欠失して不明。あぐはない。34は鈎。垂直な軸に広くふところを作って斜めにまげる。先端は欠失してふいめい。軸部断面は偏平につくられる。38も鈎かと推する。但し34とは軸部の形状が逆向きに偏平につくられ、更に34のような明瞭な四角形を示さないなどの違いがあり、別機能を有するものであろう。30はクサビ状のもの、31、32、35は釘、29は火箸である。

銅製品: 武器他が出土している(P.L. 19)。28は甲冑、梅壇板か胸板の一部かと推するものである。33、29は飾金具、34は止め金具、37、38は縁金具である。40は薄い銅板を折り曲げたもので一端に穴があり、二つに折りまげ2枚を一緒に綴じた様である。44は薄手円形のもので、微隆起線を1条廻し内外を区分する。内側には花卉状のもの(藁?)が浮き出さされている。仏具類の盤等の一部かとも推される。43は鉢形の容器である。地に鉄を用い銅で包んでいるようである。

#### C その他

49は陶唾である。P.L. 18-74～76は羽口である。74は土製、75、76は石製である。いずれも第6号建物跡周辺から出土している。75、76の先端は火熱を受けた部分が斜めに変色し、76ではその反対側に挟りがつくれ、使用の状態が伺われる。37～43は鉄滓である。

尚6号建物跡南の焼土27からは鉄滓49g、鍛造銅片6.3g、径1～4m程の粒状の鉄分2.4g等が抽出された。

その他の出土遺物に銅銭がある。15J9で11点、4号建物跡周辺に48点が集中していた。

又P.L. 20-2は焼土7出土の骨角器である。鯨又は海獣骨を用いた中柄と思われる、火熱を受けている。

陶磁器の示す年代は、白磁挟り入り高台の丸皿、瀬戸・美濃蓮弁文碗、珠洲系裏等15世紀後半以降染付獅子皿(P.L. 17-42)瀬戸・美濃うちはがし丸皿、志野唐津等16世紀末葉までの勝山筋跡の存続期間全般にわたっている。器種の構成は碗皿に檜鉢、少量の襷類からなり、日常生活用具に限られるようである。中でも鉄種の所謂天目茶碗

が殆んど見られないのは際だった特色とすることが出来る。香炉、茶器等も見られない。

他方、鉄・銅製品の出土が多く見られ、銅製品では鍔金具等が多く、鉄製品では37号竪穴を中心に、小札の出土量が多い。

又27号焼土や6号建物跡周辺、37号竪穴等々で羽口、鉄滓、鍛造削片等が顕著に見られた。

既述のとおりこれら各種遺物について出土地点

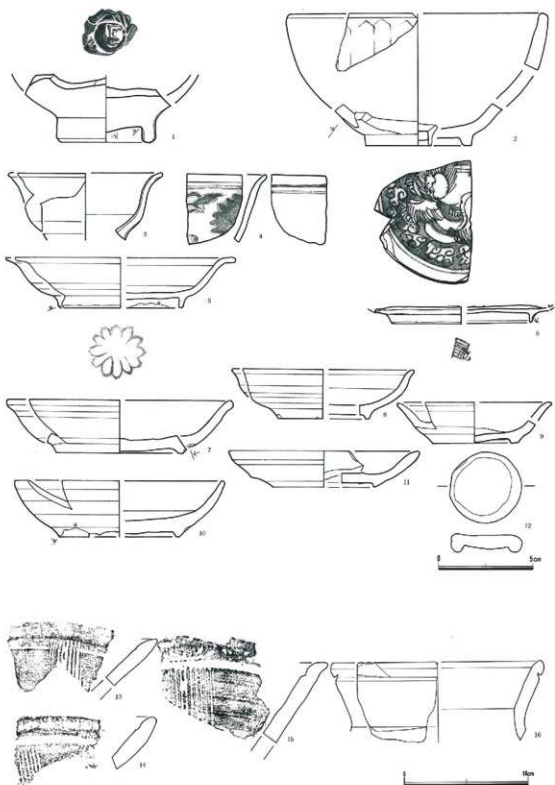
と層位、接合関係、更には各遺構との関連等について充分な検討を行うことができなかった。この為、なお個々の遺物については勿論、各遺構更にはこの空壕東部の小平坦面の性格等については全く把握されていない状況にある。更に検討を加える所存であることを記しておきたい。

尚出土陶磁器の一覧を付した。(松崎)

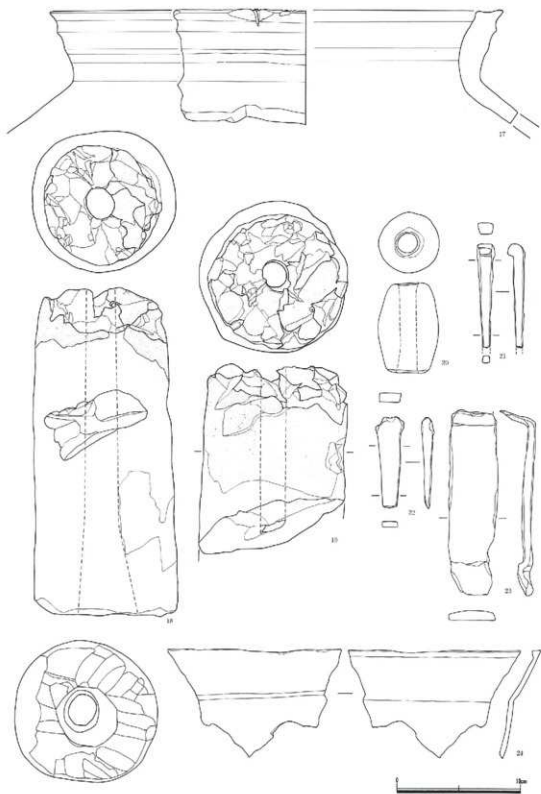
表9 空壕跡東平坦面陶磁器集計表

調査区	遺構	東地		新					西					南					合計
		青磁	白磁	染付	赤絵	襷絵	小計	瀬戸・美濃 灰胎	鉄胎	志野	唐津	小計	高取	越前	兵庫	瀬戸 美濃	唐津	信楽	
南	陶	1	2				3	2											5
	皿	3	12	16			31	19			1	20	51						51
	杯																		
	香炉																		
	燈鉢																		
	唐・曹・鉢													15					15
	灰物																		
	瓦製	1					1						1						1
	計	5	12	16			35	21			1	22	57	15					15
	陶	12		16	2		30	3	4			7	37						37
皿	8	20	13	1		42	53			1	2	56	98					98	
杯													1					1	
香炉																			
燈鉢																			
唐・曹・鉢													9	1				10	
灰物													3	1				4	
その他																			
計	20	21	29	3		73	56	4	1	2	63	136	12	2				14	
陶																			
皿	2		2			4	3					3	7					7	
杯																			
香炉																			
燈鉢																			
唐・曹・鉢																			
灰物																			
その他																			
計	2		2			4	3					3	7					7	
陶																			
皿						1	1					1	2					2	
杯																			
香炉																			
燈鉢																			
唐・曹・鉢																			
灰物																			
その他																			
計			2			2	3					3	5					5	
陶	13		19	2		34	6	4				10	44					44	
皿	13	32	32	1		78	77		1	3	81	159						159	
杯													1					1	
香炉																			
燈鉢																			
唐・曹・鉢														24	1			25	
灰物														3	1			4	
瓦製	1					1							1					1	
計	27	33	51	3		114	83	4	1	3	91	205	27	2				29	

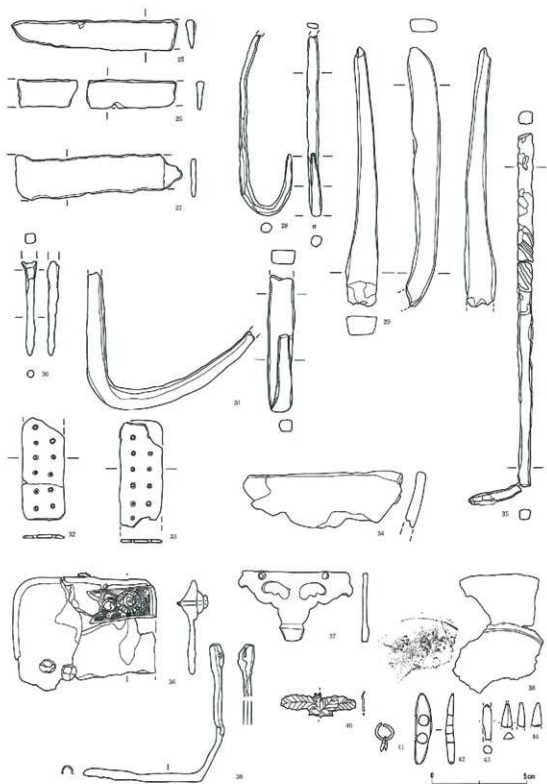




第32図 空壕跡東平垣面出土遺物



第33図 空堀跡・東平垣面出土遺物 (17は空堀履土)



第34図 空堀跡東平坦面出土遺物

#### 4. 15LM区(北側トレンチ)試掘調査(第35図)

##### (1) 位置概要

御代参道路北側段の下の平坦部で御代参道路南側と同様に空壕A、空壕Bの存在を確認する事を目的とした。尚トレンチの規模は幅3.5m×長さ14mである。

##### (2) 層序

###### 空壕A

15L10区～15L15区にかけて確認された。規模幅8.6m、深さ1.4m程である。覆土はセクション及び表10によるとI層は10Y R<sub>2</sub>%暗褐～10Y R<sub>2</sub>%にふい黄褐シルトをベースにし基盤礫が含有される。5層に細分された。さらに20cmの厚さのII層の下にIII'A層が堆積する。III'A層は32層に細分され10Y R<sub>2</sub>%褐～10Y R<sub>2</sub>%黄褐シルトをベースに炭化物、基盤礫、ロームブロックが含まれ、やや粗とやや密の層がある。53より62までは、やや密である。63以下はしまりが一定していない。御代参道路東側空壕Aに比し、浅く、幅が若干広い。

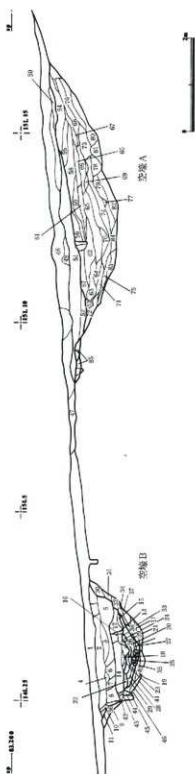
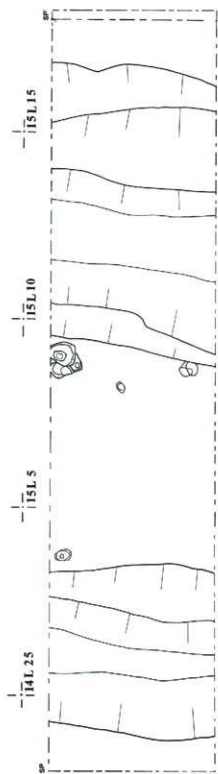
###### 空壕B

14L20区～14L25区にかけて確認された。規模は幅3.2m、深さ1m程である。覆土はセクション及び表10によると10Y R<sub>2</sub>%にふい黄褐～10Y R<sub>2</sub>%明黄褐シルトのI層の下に10Y R<sub>2</sub>%にふい黄褐～10Y R<sub>2</sub>%明黄褐シルトをベースに炭化物、ロームブロック、基盤礫が含有されるIA層、さらにその下に10Y R<sub>2</sub>%黄褐～10Y R<sub>2</sub>%にふい黄褐シルトをベースにロームブロック、炭化物が含まれるIB層が

堆積する。IA層、IB層とも10層に細分される。いずれも明治以後の整地層と考えられる。II層は大きくIIA層とIIB層に分けられる。IIA層は10Y R<sub>2</sub>%にふい黄褐～10Y R<sub>2</sub>%黄褐シルトをベースにOS-a等が含有される4層に細分された。IIB層は10Y R<sub>2</sub>%にふい黄褐～10Y R<sub>2</sub>%にふい黄橙シルトでやや粘性をもち、やや粗である。以下はIII'B層で10Y R<sub>2</sub>%暗褐～10Y R<sub>2</sub>%黄褐シルトで基盤礫との混層であり炭化物等が含まれやや密である。空壕Aと同様御代参道路東側空壕Bに比し浅く、幅が若干広い。尚平面上空壕Aと空壕B間の平坦部に位置するピットの性格は不明である。次年度の当地区の調査に期するところである。

##### (3) 出土遺物(P.L. 19-53-69)

青磁、白磁、染付、美濃の碗、皿、盤、越前糸のかめ、壺、摺鉢等が出土している。いずれも小破片であり計39点程である。青磁では盤、菱花皿が出土している。盤は外面口縁部をくの字状に外反させ、端部を上方に引き上げ、内部には幅広の蓮弁文をもつものである。釉調は14G7.5の3Sグレイみの黄である。白磁は端反り口縁の皿等がみられる。染付は碗、皿が出土している。碗では、外面口縁部に2条の圓線が入り梅月文の描かれるもの、体部に芭蕉葉文の描かれるもの、皿では葎筋底のものがみられる。美濃では端反り口縁の皿が出土している。また前述の青磁の盤は15世紀末頃のものとして推される。これらの示す年代は15世紀末～16世紀中葉である。(齊藤)



第35図 北側トレンチ平面図、セクション図

表10 15L区トレンチ空墳A空墳B土層観察表

目録 番号	層			土 質		土 性	観 察	備 考
	基本層	小区分	組 別	JIS notation	土 色			
1	I			MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色鉄塊 <sup>+</sup>	シルト	草根多 <sup>+</sup>	中々粗
2	I	A	1	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層5%	空墳B黄土
3	I	A	2	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層6%炭化物 <sup>+</sup> ロームアブロック2%	上より中々粗
4	I	A	3	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	ロームアブロック3%	空墳B黄土
5	I	A	4	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	炭化物 <sup>+</sup> 基盤層6%中々粗あり	中々粗
6	I	A	5	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~15%鉄塊	空墳B黄土
7	I	A	6	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄褐色	シルト	ロームアブロック10%基盤層大5%	空墳B黄土
8	I	A	7	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	ロームアブロック2%	中々粗
9	I	A	8	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	草根多あり	空墳B黄土
10	I	A	9	MY R <sub>N</sub>	黄褐色	シルト	基盤層10%鉄塊あり	空墳B黄土
11	I	A	10	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~10%ロームアブロック3%	中々粗
12	I	B	1	MY R <sub>N</sub>	黄	シルト	ロームアブロック3%中々粗	中々粗
13	I	B	2	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~大10%ロームアブロック3%	中々粗
14	I	B	3	MY R <sub>N</sub>	黄	シルト	ロームアブロック3%中々粗	中々粗
15	I	B	4	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	ロームアブロック2%結晶土炭化物10%	空墳B黄土
16	I	B	5	MY R <sub>N</sub>	黄	シルト	基盤層中2%	中々粗
17	I	B	6	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	炭化物 <sup>+</sup> 結晶土あり	空墳B黄土
18	I	B	7	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	炭化物 <sup>+</sup> ロームアブロック5%	中々粗
19	I	B	8	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	炭化物 <sup>+</sup> 10%ロームアブロック15%	中々粗
20	I	B	9	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	ロームアブロック20%	空墳B黄土
21	I	B	10	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄褐色	シルト	ロームアブロック5%、炭化物10%	中々粗
22	II	A	1	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~13%O.S~x10%	空墳B黄土
23	II	A	2	MY R <sub>N</sub>	黄褐色	シルト	中粗	空墳B黄土
24	II	A	3	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	粘質土	O.S~x2%ロームアブロック10%	空墳B黄土
25	II	A	4	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄褐色	粘質土	中粗	空墳B黄土
26	II	A	1	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	粘質土	O.S~x15%	空墳B黄土
27	II	B	2	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄	粘質土		中々粗
28	II	B	3	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	O.S~x10%	空墳B黄土
29	II	B	4	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	O.S~x10~15%	中々粗
30	II	B	1	MY R <sub>N</sub>	黄	シルト		中々粗
31	II	B	2	MY R <sub>N</sub> -N	黄、暗褐色	シルト		中々粗
32	II	B	3	MY R <sub>N</sub>	黄	シルト	基盤層15%、炭化物1%	中々粗
33	II	B	4	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	ロームアブロック1%、結晶土1%	中々粗
34	II	B	5	MY R <sub>N</sub>	黄褐色	シルト	基盤層1%	中々粗
35	II	B	6	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄褐色	シルト	基盤層大20%	中々粗
36	II	B	7	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~中15%ロームアブロック1%	中々粗
37	II	B	8	7.SY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	炭化物 <sup>+</sup> 、O.S~x2% 草根多、シルト、中粗	中々粗
38	II	B	9	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄褐色	シルト	基盤層大20%	中々粗
39	II	B	10	MY R <sub>N</sub>	黄褐色	シルト	基盤層大2%	空墳B黄土
40	II	B	11	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	粘質土	ロームアブロック2%、中粗 炭化物15%、炭化物1%	空墳B黄土
41	II	B	12					空墳B黄土
42				MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト		中々粗 P1:黄土
43				MY R <sub>N</sub>	黄	シルト		中々粗 P1:黄土
44				MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	中々粗		中々粗 P1:黄土
45				MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	中々粗		中々粗 P1:黄土
46				MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	中々粗		中々粗 P1:黄土
47	I		1	MY R <sub>N</sub> -N	黄	シルト	草根多5%	中々粗
48	I		2	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~2%	中々粗
49	I		3	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層大5%	中々粗
50	I		4	MY R <sub>N</sub> -N	暗褐色、⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~10%	中々粗
51	II		1	MY R <sub>N</sub>	黄	シルト		空墳A黄土
52	II		2	MY R <sub>N</sub>	黄	シルト	中粗	空墳A黄土
53	II	A	1	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	ロームアブロック20%	中々粗
54	II	A	2	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~中5%	中々粗
55	II	A	3	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	基盤層中~中8%	空墳A黄土
56	II	A	4	MY R <sub>N</sub>	黄褐色	シルト	基盤層中~5%	空墳A黄土
57	II	A	5	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	ロームアブロック、基盤層大	空墳A黄土
58	II	A	6	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	草根中粗~大10%	中々粗
59	II	A	7	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄褐色	シルト	基盤層中~大6%	中々粗
60	II	A	8	MY R <sub>N</sub> -N	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色、黄褐色	シルト	基盤層中~10%	中々粗
61	II	A	9	MY R <sub>N</sub>	黄褐色	シルト	基盤層中~大10%	中々粗
62	II	A	10	MY R <sub>N</sub>	⑫.21 <sup>+</sup> 黄褐色	シルト	炭化物 <sup>+</sup> 基盤層5%	中々粗

表10 15L区トレンチ空壕A空壕B土層観察表②

区画 番号	層		序 号	色	土質	土性	組成	備考
	基本層別	小区分						
53	Ⅲ	A	11	10YR5/1	にぶい黄褐色	シルト	炭化物1%、ロームブロック1%	空壕A覆土
54	Ⅲ	A	12	10YR5/1	にぶい黄褐色	シルト		空壕A覆土
55	Ⅲ	A	13	10YR5/1	均質塊	シルト	高砂礫30%炭化物1%、シルト混層付、にぶい	空壕A覆土
56	Ⅲ	A	14	10YR5/1-2	にぶい黄褐色	シルト	高砂礫小1%	空壕A覆土
57	Ⅲ	A	15	10YR5/1	黄褐色	シルト	高砂礫30%	空壕A覆土
58	Ⅲ	A	16	10YR5/1	黄褐色	シルト	高砂礫小-中	空壕A覆土
59	Ⅲ	A	17	10YR5/1	塊	シルト		空壕A覆土
70	Ⅲ	A	18	10YR5/1-2	塊、にぶい黄褐色	シルト	炭化物2%、高砂礫30%	空壕A覆土
71	Ⅲ	A	19	10YR5/1	黄褐色	シルト		空壕A覆土
72	Ⅲ	A	20					空壕A覆土
73	Ⅲ	A	21	10YR5/1	黄褐色			空壕A覆土
74	Ⅲ	A	22	10YR5/1	にぶい黄褐色		高砂礫10%	空壕A覆土
75	Ⅲ	A	23	10YR5/1	黄褐色	シルト	ロームブリーク2%炭化物均等量中-大30%	空壕A覆土
76	Ⅲ	A	24	10YR5/1	黄褐色	シルト	高砂礫大30-35%	空壕A覆土
77	Ⅲ	A	25	10YR5/1	塊	シルト		空壕A覆土
78	Ⅲ	A	26	10YR5/1	塊	シルト	高砂礫中20%	空壕A覆土
79	Ⅲ	A	27	10YR5/1	黄褐色		高砂礫大30%、炭化物1%	空壕A覆土
80	Ⅲ	A	28	10YR5/1	黄褐色			空壕A覆土
81	Ⅲ	A	29	10YR5/1	黄褐色		高砂礫大20%、炭化物2%	空壕A覆土
82	Ⅲ	A	30					空壕A覆土
83	Ⅲ	A	31	10YR5/1-2	黄褐色、塊	シルト	高砂礫小中5%	空壕A覆土
84	Ⅲ	A	32	10YR5/1	塊	シルト	高砂礫小-中大20%	空壕A覆土
85	Ⅲ	A		10YR5/1	黄褐色	シルト		空壕A覆土

### III 小 括

第二平坦面の端部に数条の櫛列が検出されたが時間差を示すもので本来一条で構成されると推される。巾20、深さ50cm前後の溝を掘りそこに径10cm前後の丸柱が埋設される。柱間は4～17cmとややバラつくが比較的密に立てられる。柱の径に大小あるが配置上の規則性は見出し得ない。62年度調査区(16J25)で櫛列の内側に近接して柱穴が検出され、櫛と一体の施設を推測した。掘手の櫛列の外側にも小柱穴列が検出されており(本概報V)、斜面肩に柱穴だけが確認されたものも、崩落による上部の流失なのか検討が必要である。こうした前後の付帯施設、遺構の追求が不十分なまま当該地区の調査を終結したことは大きな課題を残すこととなった。

端部の櫛列は南西宮ノ沢斜面上に周る。第二平坦面の斜面肩を巡って第三平坦面、掘手の櫛列に連続すると思われる。第三平坦面の櫛列(第8～10号地割面-本概報VI)の柱間は広く離れており、場所により異なるようである。

又、深さ50cm前後の溝底に立てられた櫛の地上部の高さはどれぐらいであろうか。「築城記」<sup>21</sup>には塙の高さ5尺2寸、櫛は6尺余、山城は低くとある。又、櫛は1間の内に5本ほど柱を立て人が通らなくするとあるが、検出された柱穴は塙に

近い様子を示している。

第一平坦面の調査では目的とした二条の壕の新旧を直接明らかにする手懸りは得られなかった。空壕Aを跨ぐ4対の柱穴はかなり大きな構造物を推測させるが、その実体は明らかでない。

壕と壕の間の土壁群のうち1基は明らかに墓塚であり他の土塚も類似的形状をしており、同種遺構かもしれない。

空壕AとBの覆土の堆積は随分と違っている。Ⅲ'Aの厚い層中に人為的再堆積はみられず、上段からの崩落、流入と考えられる。逆にⅢ'Bの堆積は極めて薄く、O-S-a(1741年)と抱えている火山灰を含むⅡ層堆積後、短期間に埋没している。壕の東の平坦面は、第二平坦面の端部から空壕Bの東2m程のところに緩やかに続く斜面を閉り、壕を掘り上げた土を整地して造成したものであろう。従って平坦面上の遺構と少なくとも空壕Aとは同時に存在したと思われる。

空壕BがAに先行して設けられた可能性もあるが、B西に近接する小柱穴列等はBに付帯したものと解され、他方その掘り込み面を更に高く求めることもむづかしい。又、東平坦面の遺構の軸線は殆どがBに平行していることもBと平坦面上の遺構の同時性を伺わせる。他方Bに跨がり、B

によって欠失した遺構の検出されていないことはその逆の可能性を少くしている。

蛇足ならAに跨がる大形の柱穴、土壇等は少くともA以前に廻るものではない。

盛り土整形以前の遺構は旧地表面に残されている可能性があるが、その面までの掘り下げは殆んど行っていない。15J5区にトレンチを設け、巾1m程旧地表面まで掘り下げたが、柱穴その他の遺構は認められなかった。

現在得られた資料をもとに遺構の形成時期を推測したところであるが、空壕跡北半、中央部の調査時に更に留意し検討したく思う。

本年度調査区出土の陶磁器は1,300点弱(但し15L区トレンチのものを除く)であるが、そのうち1,000点弱は、櫛列周辺、及び空壕覆土の遺物である。空壕覆土の遺物は基本的に第二平坦面からの流れ込みと推され、壕東平坦面からの出土陶磁器は234点余となる。

櫛列跡周辺の遺物には勝山館跡で出土した殆どどの遺物が認められている。茶臼、茶釜?、鏡等は、出土例の少ないものであり留意される。他方陶鉢、羽口、鉄滓等もあり、種々の様相が推される。

壕東の小平坦面からは230点余の陶磁器が出土した。碗の4倍程の皿と、碗皿の8分の1程の摺鉢甕類で構成される。香炉、袋物等がなく、碗、皿中に占める鉄軸類が2%弱と櫛列周辺の5%弱に比べかなり少い。一方碗皿中の舶載品の比は55%余で僅かではあるが少なくなる。これらの組み合わせは碗皿を主とする日常食器類のようである。

これに対し鉄製品、鉄滓が3kg余出土し、各々の2分の1前後か一定の範囲に集中して分布する。又、武器等の銅製品も多く見られる。

この小平坦面で検出された遺構は掘立柱の建物跡と堅穴遺構である。

1~7号の掘立柱建物のうち、柱穴にまともりをみたのは1、3~6号であり、3~6号の柱筋はほぼ同一方向となる。又3基の堅穴もこれらと同一の軸を持つ。掘立柱建物は3×3間の長方形を基本とするものが多い。第3号建物跡としたものは柱間も等間と最も整った状態を示している。

3~6号の軸線を同じくする建物跡を同時期と仮定した時、3間×3間の建物が3棟同時にあり、1棟だけ長軸を90°異にすることは何を意味するのであろうか。3×3間という建物自体、その構

造をどう考えるべきなのか。わからないことばかりである。又、堅穴の果す機能がこの平坦面に不可欠のものであるとすれば、35号堅穴を更に同一時期のものと想定し得るところである。只、鉄滓等の出土は細部は未検討であるが第6号建物跡に共通する感じがあり、或は堅穴の機能がこれに移されているとも推されるところである。この時2号とした柱列が建物として併存したかもしれない。堅穴遺構が3基検出され、少なくとも二時期にわたると推されるのに対し掘立柱の建物に明瞭な建て替えの跡を検出し得なかったことは、こうした推測を消極的にすることになっている。

こうした建物跡の推移、組み合わせ等を検討するためには、個々の遺構に対する、相伴遺物の決定その他の分析作業が必要なことはいうまでもない。従って上述の内容は現時点にあっては単なる思いつきの範囲を出ないものである。

出土遺物から見る本小平坦面は伝付屋敷跡よりは陶磁器の量が豊かであり、第二、第三平坦面に比べて単純な組成を示し、鍛造剥片等を検出する点は伝付屋敷跡とも共通するが、鉄製品等の量は第二、第三平坦面に近く、諸種の銅製品出土は、ところによっては、第二、第三平坦面を凌ぐことになると推される。

総柱の建物跡が検出されず、堅穴遺構が存在することは、第二、第三平坦面に通ずる、館主体部に共通の特徴とすることができそうである。

しかし、これに伴うと思われる掘立柱の建物跡は共通した、比較的単純な構成を示しているが、その構造は今少し明らかでないようである。

尚、宮ノ沢側へ切り落とされた空壕Aが二手に分れ、一は西へ第二平坦面南端斜面下に沿うようであることは全く予想外の事であった。殊に後者の先行きは空壕Bとの関係や、本平坦面南端を一段低く東へ下る道路跡が南から西へと回り、付屋敷へ到る道として連なっているものと推されることから、この道との関係等について更に検討すべき問題点を提示するところとなった。

これらの課題を踏まえ15L区トレンチで確認した北半の空壕等の遺構の調査を次年度に実施する所存である。(松崎)

註) 本書は鈴木直先生のご高配により実見することができた。記して感謝申し上げたい。



表11 陶磁器集計表

調査区	産地 種別	船						回						産					合計		
		青磁	白磁	磁石	赤絵	煎餅	小計	瀬戸・美濃 灰釉 鉄釉	志野	唐津	小野	高取山	越前	珠洲	瀬戸 美濃	唐津	備前	小計			
備前	陶	20	3	17	2		42	20	17			37	79							79	
	磁	12	45	72			131	95	1			1	97	228						228	
	瓦																				
	葺																				
	香炉																				
	權筆													73	3	1			77	77	
	襷・磁・鉢													4					4	4	
	磁物							1	1											2	
	その他																				
	計	33	49	89	2		173	116	19		1	136	309	73	7	1			81	300	
宮城	陶	13	5	66	1		85	12	21			33	118							118	
	磁	10	127	88	2		238	155	1		1	157	395							395	
	瓦		4	1			5					5								5	
	葺	2					2					2								2	
	香炉																				
	權筆																				
	襷・磁・鉢													67		1			68	68	
	磁物													14	1				15	15	
	その他																				
	計	25	145	155	4		330	167	22		1	190	520	81	1	1			83	633	
宮崎	陶	13		19	2		34	6	4			10	44							44	
	磁	13	32	32	1		78	77		1	3	81	159							159	
	瓦		1				1					1								1	
	葺																				
	香炉																				
	權筆																				
	襷・磁・鉢													24	1				25	25	
	磁物													3	1				4	4	
	その他																				
	計	27	33	51	3		114	83	4	1	3	91	205	27	2				29	234	
岡山	陶	1		7			8	2				2	10							10	
	磁	1	9	4			14	21				21	35							35	
	瓦																				
	葺																				
	香炉																				
	權筆																				
	襷・磁・鉢																				
	磁物																				
	その他																				
	計	2	9	11			22	23				23	45	3					3	48	
調査区 外	陶								1			1	1							1	
	磁		2	2			4					4								4	
	瓦																				
	葺																				
	香炉																				
	權筆																				
	襷・磁・鉢																				
	磁物																				
	その他																				
	計		2	2			4		1			1	5	2					2	7	
総計	陶	45	8	109	5		170	40	43			83	253							253	
	磁	36	226	198	4		464	248	2	1	5	356	820							820	
	瓦		5	1			6					6								6	
	葺	2					2					2								2	
	香炉																				
	權筆																				
	襷・磁・鉢													168	4	2			174	174	
	磁物								1	1				18	6				24	24	
	その他	1					1	1				2	2							2	
	計	87	230	308	9		643	389	46	1	5	441	1084	186	10	2			198	1282	

## IV 保存処理

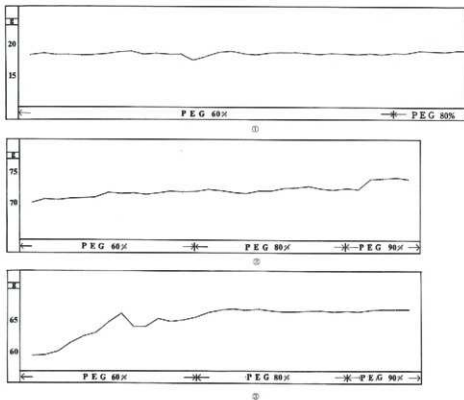
### 1. 木製品

今年度は箸、折敷等の生活用具等1,015点、昭和58年度用水施設跡より出土の木樋を処理対象として実施した。生活用具等は昨年度まで常温状態でPEG40%含浸中のものである。今年度は従来と同様60%、80%、90%の順に標準液温65°Cの状態にてPEG含浸を行った。第36図2・3は恒温水槽内の木製品重量変化グラフである。尚重量測定は恒温水槽内の任意に抽出した木製品である。尚2は含水率の高い木製品、3は含水率が低くややしっかりした木製品である。2では59gから67gへとその増加率は約1.13倍である。尚80%以降重量に殆んど変化は見られない。3では70gから74gへとその増加率は1.06倍となる。木樋は一昨年度まで常温状態で20%、40%含浸をそれぞれ1年、昨年度標準液温65°Cの恒温状態にて1年間の60%

含浸を経てきている。今年度は60%含浸に引き続き80%含浸を行った。尚木樋が4.9mのため水槽が約6mと大きく、PEG溶液内の水分蒸発が激しいため2~3週間に一度水のつぎ足しを行なった。尚重量測定用木製品は木樋の小破片にて行なった。第36図1によると18.4gから20gへとその増加率は約1.09倍であった。尚木製品重量測定、PEG濃度測定は1週間毎である。生活用具等PEG処理を完了した遺物は昨年同様 Etaノールをかけた軽いブラッシングをし表面に余分に付着しているPEGを除去した。

### 2. 鉄製品

今年度は600点の処理を行なった。従来通り錆除去、メタノールによる脱水、パラロイドNAD-10のナフサ溶液20%、30%による減圧含浸を行なった。(斎藤)



第36図 木製品重量変化グラフ

## V 「勝山館跡出土炭化種子の識別」

松谷 晚子

資料は、ビニール袋に入れられた炭化種子で、塊をなすものと、遊離した種子の二通りである。

### 1. 方法

一点ずつシャーレに移し、実体顕微鏡で外形を観察し、分類した。一部の種子はさらに走査型電子顕微鏡で微細構造を観察した。

### 2. 実体顕微鏡での観察結果

塊をなしているものに大きな粒と小さな粒があり、大きな方は、イネ科に特徴的な乳頭突起が認められるものがあり、イネと考えられる。小さな方は、イネ科の雑穀と考えられる。イネ科雑穀には、ヒエ、アワ、キビなどがある。この小さな雑穀の識別は、炭化粒の表面に外穎が残っている場合に可能である。実体顕微鏡下で横方向の隆起が認められる場合にはアワの仲間、表面が光沢があり、横方向の隆起が認められない場合にはキビかヒエの仲間という見当がつけられる。しかし、走査型電子顕微鏡で表皮細胞を観察し、その形態の相違を併用した方がより明確になる。塊をなしている、イネかイネ科雑穀が不明のものもあった。塊をなさない種子ではイネ、イネ科雑穀の他に、外形から小豆、ソバ、なども識別された。小さな円形の種子が多いのは、アブラナ科の種子かと思われる。もっと大きなものにクルミの殻(内果皮)の半欠けがあり、小さな破片になったものもあった。キハダと記された種子は、キハダの果実の中に種子が入っていた。他にヤマブドウの種子が認められた。また、スギナ類の塊状の貯蔵根や炭化材の破片も混在していた。前者は炭化していないので現在のものの混入と思われる。

### 3. 走査型電子顕微鏡によるイネ科雑穀の識別

日本で古くから栽培された主なイネ科雑穀は、ヒエ、アワ、キビの三種であるが、粒が1-2ミリと小さいため外形からの識別だけではなく、表皮細胞の形態による差異を利用する方法が有効である(松谷 1988)。勝山館跡から出土したイネ科雑穀は比較的多く、塊をなすものもあれば、遊離した粒もあるが、穎の残存しているものについて観察をしたところ、表皮細胞の形態はキビの細胞に似ており、ヒエやアワと思われる構造は見いだ

すことが出来なかった。全部について実施する時間はなかったので断定はできないが、実体顕微鏡での観察結果を総合すると、キビが主体と思われる。

アブラナ科の種子については、笠原安夫氏によって縄文時代からの報告例(笠原 1985など)がふえており注目されるが、今回出土した炭化種子は保存状態もあまりよくなくて、種類までは判明できなかったが、1ミリくらいの小形種子と3ミリくらいの種子と大きさに二種類あり、前者をアブラナ科A、後者をアブラナ科Bとした。

### 4. まとめ

識別された植物は、栽培植物と野生利用植物に二分される。

野生食用植物では、クルミとヤマブドウがあり、これらは食用に利用された残さいであろう。ほかに種名も用途も不明のものがある。

栽培植物は、稲付イネが多い。塊をなしているものが多い。キビと考えられる雑穀も穎が残存しており、未使用であろう。イネとキビは同じ資料に混在している場合があった。ソバはあまり多くないが、アズキと同定された資料は6点あり量も比較的多くまとまっている。アブラナ科と思われる種子も多く、大きさに二種類あるが、保存状態はあまりよくない。大麦や小麦が全く見いだされなかったのは、意外であった。これまでに観察したことのある真壁城(松谷1983a)、葛西城(1983b)、岐阜城(松谷印刷中)などでは、大麦が多く認められたのと対照的である。

上記の炭化種子の出土した地点は様々で、貝塚(遺物廃棄場所)周辺、館内主要部の建物跡内、正面空壕の外側(第一平坦面-63年度調査区)、伝侍屋敷跡・倉庫と推定される建物群などにおけることであるが、遺構ごとに若干の違いが認められ、館主体部では、イネ、キビ、ソバ、小豆の主要食用作物とクルミ、キハダが見いだされたのに対し、伝侍屋敷跡では、アブラナ科とヤマブドウしか見いだされず、正面空壕外(第一平坦面)には、アブラナ科、イネ、キビ、ヤマブドウ、マメ類など種々様々な種子が見いだされた。

倉庫跡に相当する資料は見いだされないので言及できない。

#### 文献

笠原宏夫 1985 阿曾田遺跡出土炭化種子の同定。岐阜市中津川市阿曾田遺跡発掘調査報告書、中津川市教育委員会。

松谷晚子 1983 a 真壁城跡出土の炭化物について。真壁城跡—中世真壁の生活を探る—、真壁町教育委員会。

松谷晚子 1983 b 葛西城址出土大麦の走査電子顕微鏡による観察。葛西城、葛西城址調査会。

松谷晚子 1988 電子顕微鏡でみる縄文時代の植物。畑作文化の誕生—縄文農耕論へのアプローチ—、日本放送出版協会。

松谷晚子（印刷中） 千疊敷出土穀物の同定。岐阜市教育委員会。

## VI 環境整備工事

昭和63年度の整備工事は正面第一平坦面と第二平坦面の5m余の段差を有する斜面とそれに続く空壕跡の法面保護のための芝張りとして昭和62年8月、史跡の範囲に追加指定された夷王山墳墓群の説明板設置を行った。

#### 〈芝張り〉

遺構確認調査によって検出した遺構面に10cmの盛土を行い、その上に芝張りを実施することとした。第一平坦面と第二平坦面との間の段及び空壕跡の側壁は急傾斜面となっており、盛り土をおさえる土留め工を行うこととした。工事は巾15cm、厚さ3cm、長さ1.8mの松板を50cm間隔で、径1cm、長さ30cmの鉄筋を15cm打込んで固定させ、土を入れる方法によった。

#### 〈夷王山墳墓群説明板〉

説明板はパーナー仕上げをした黒ミカゲ石にヘアライン仕上げのステンレス名板を取り付けた。名板には夷王山を取り巻くVI地区の墳墓群の分布図と説明文をエッチング処理により印刷した。

### 夷王山墳墓群

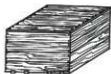
勝山館の背後から夷王山の麓のあたりに、六地区に分れて600基余りの墓がある。大きさは2×1.8m、高さ40cm程の円形で、大きなものは7m程のものもある。

火葬した骨を箱に納めて埋めたり、遺体をそのまま長方形の箱に納め土葬にし、土や石を高く積んで墓を作っている。宗鏡や明鏡の納められることが多いが、大きな墓には漆塗りの盃、硯、玉なども納められていた。このように埋葬の仕方に違いはあるが、いずれも仏教を信仰していた人達の墓と思われる。

これらの墳墓群には、勝山館を築き道南和人社会を確立した武田信広とその一族、要には勝山館を中心に中世の上ノ国を支えた多くの人達が眠っていると思われる。



副葬品出土状況（1-30号墳）



木棺推定復原図

第37図 説明板詳細図

## Ⅶ ま と め

勝山館跡の主体部は大きな三段の平坦面からなっている。一段目と二段目の段差は5m余と最も大きい。第一の平坦面（第一平坦面）南東半には昭和30年代の後半に杉などが植樹され、旧状が判らなくなっていた。これらを除去し景観を復す為の仮整備を行ったところ、館の正面が立体的に姿を現わし、塚跡らしい凹みまで見つかった。

62年度にトレンチを設定し遺構の確認を行ったところ、二条の空壕跡が検出され、第二平坦面の端部に櫓列の設けられることが判明した。

63年度はこの櫓列と空壕跡、更にその北東の小平坦部の遺構を明らかにする確認調査を行った。

櫓列跡は溝の中に丸太を密に立て並べたもので数次の造り替えが行われていることが判った。櫓の直近に補強その他の関連施設も予測されていたが、充分調査できなかった。

第一平坦面と第二平坦面の5m余の段差は人工的に斜面を切り取ってつくられたものであり、その下に3m弱、空壕Aが掘り下げられていたことが判った。このAの更に外側に2m弱の深さのBがつくられている。又切り取られ、掘り上げられた土を前面に盛土・整地して第一平坦面が作られていると推測できた。

5m余の段差をもって造り出された第二平坦面と直下の空壕Aは、そこから生じた排土で整地された前面の第一平坦面と併行すると推測することができる。

一方、第一平坦面の最も塚に近い小平坦部で検出された遺物跡の軸線と空壕Bの軸線がほぼ平行していることは、この両者の同時性を推測させる。空壕Bの軸線に併せて小平坦部をBの外側に造成するのは余り効率的ではない。Bが古い場合も新しい場合も、小平坦部内の建物跡がB側に広がっている様子は見られない。最大巾4m弱のBの真中からAの間に建物が建てられた可能性は少なく、5m余の段、空壕A・B、前面の小平坦部はほぼ同時に存在していたと推される。

これらの遺構が同時に形成されるには、綿密な計画と組織的な土木工事が実施できる体制が備わっていなければならないであろう。

これらの遺構の形成された時期についての確証

はないが、遺構面からの遺物の示す年代は15世紀末～16世紀末と館の存続した初期から廃絶期と推される間を示している。又、小平坦部の竪穴遺構は重複に近いものもあり、建て替えが行われていると思われるが、掘立柱建物跡には明確な建て替えの跡は確認できなかった。

空壕Aの北東前面には約100m<sup>2</sup>の空間がある。そこに空壕Bを設けた結果前方の平坦部は60m程に縮小される。しかし一方、AとBの間は3～4mと狭く館を攻撃する寄手の勢力はBの外側に殆どが止められることになりBを越えてくる攻撃を薄いものにする効果があるかと推される。

各遺構の性格については遺物整理等の途中でであり明確にすることができない。

塚と塚の間に土壌墓が設けられていたが、館の後方に600基余からなる墳墓群があり、一定地域が墓域として画されているかと推されていたところであり、この発見は新たな問題点となった。

空壕Aを跨ぐ4対一組の大形の柱穴の性格は、中央部での塚を渡る施設等の調査と併せ検討することとした。

塚の北東小平坦部で掘立柱と竪穴の建物跡が検出された。掘立柱の建物跡は平面形が3間×3間という特徴を示しているが、建物としての構造は良くわからない。竪穴のうち1基は焼失家屋で炭化材が良く残存している。鈴木亘先生によれば、床張りの建物であろうとのことであり、壁や柱なども明らかに出来そうである。

この小平坦部から羽口や鉄棒が出土した。従来羽口の完形品乃至、大形破片や碗形滓などはその殆んどが館後方の貝塚及びその周辺から出土しており、館の内部からはあまり出土していない。他の出土遺物、竪穴遺構との共存関係等の整理が進めばこの小区画の場を考える有力な資料とすることができるであろう。

竪穴遺構があり、総柱の建物がないことは伝侍屋敷跡よりは館主体部に近いが、掘立柱建物跡は独特のものでありそうである。

碗、皿、指鉢を主とする陶磁器の質と量は、伝侍屋敷跡よりは豊かであるが、第二、第三平坦面の館主体部に比べると見劣りがするが磁治関連遺

物を多く含むという概その特徴を指摘することができるであろう。

勝山館跡の焼土層等から炭化種子を採集し、紹介してきた。

東京大学総合資料館の松谷晩子先生にこれらの資料の顕微鏡等による鑑定をお願いし、玉稿を頂戴することができました。松谷先生には大変お忙しい中無理にお願ひ申し上げましたがご快諾を賜わり、心から御礼申し上げます。

コメ、ソバ、キビ、マメ等の食料が明らかになった。従来アワ?として紹介してきたものはキビの誤りであった。又、伝侍屋敷跡でコメを食料としなかったとは出来ないが、第一平坦面、第二平坦面、伝侍屋敷跡の各々で検出された種子類が違った内容を示し、上述の、遺構や他の遺物との比較と奇妙に符合しているのは大変興味のある結果である。

環境整備工事は文化庁記念物課の御指導で、掘り上げ後の空壕、段斜面の保護の為張芝工事を行った。これにより、法面の崩落が防がれることとなった。又、62年8月追加指定となった夷王山墳墓群の説明板を設置した。

勝山館跡の歴史的な位置付けを明確にすべく朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の諸先生を上ノ国町文化財保護審議会特別委員・勝山館跡調査研究専門員としてお迎えし、現地調査と御指導を頂戴することができた。

従来、筆者等は十分な資料の分析も経ず、様々に徳説を述べ勝山館跡を喧伝してきたが、今後学問的に検討を行い性格を究明する道が開かれた事は誠に有難い事である。

昭和54年この事業が着手され今年で10年を経過した。当初10年計画で開始したことからすると最終年度になっている筈であった。

1473年の館神八幡宮の創祀から1514年福山(松前)遷都の40年程、それも和人社会の基礎固めの頃の小規模なものと予想は全く的をはずれ、膨大な遺物量とその内容は、館の性格を根本から考え直させるものであった。又その期間も16世紀末葉にまで亘る長いものとなり、地区毎に種々の遺構が形成されている様子が窺われてきた。

この10年間に出土した遺物は20,000点を超え、遺構も多数検出されている。これらの資料を一日も早く整理、解明する事が目下の急務である。徒らにあて推量を繰り返す愚を脱し、確実な資料を提示出来るよう努力をする所存である。

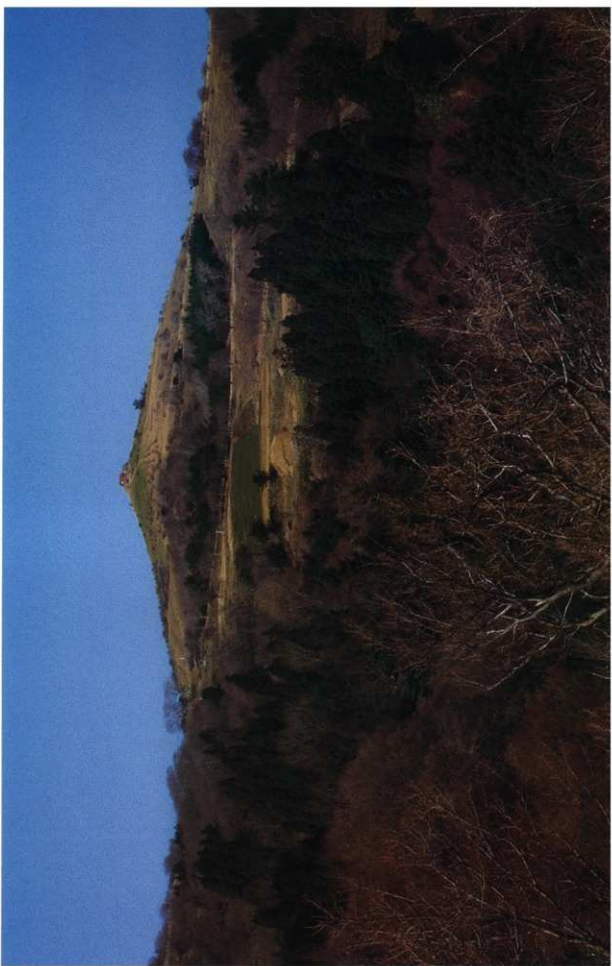
一層のご叱正とご教導をお願い申し上げます。

(松崎)

# 図 版











調査区全景（柵列跡・空塚跡・建物跡—南から）



道構整備状況（空塚跡芝張）





遺区全景  
(北西から)

P.L.  
3

調査状況

遺構検出状況(柵列・塚・建物跡 | 南西から)



遺構検出状況(建物・塚跡 | 北東から)







空堀 B 北西から



遺物跡検出状況 (北西から)







倒疊・土垣(裏)



倒疊土垣



倒疊・土垣



土垣裏



P.L. 5  
検出遺構



P.L. 6 土層堆積狀況

標列跡西端



標列跡東隅



空壕跡A



空壕跡B



空壕跡B





繩紋土衣況（塚東平相面）



出土陶器（青磁・茶色）



出土陶器（茶青皿）



出土陶器（茶付側）





出土陶磁器 (白磁・赤磁・唐津・土野)



出土陶磁器 (美野灰滑・越前)



出土金属製品 (小札・銅・鍍金)



出土木製品 (土瓶・箸他)









柵列・空壕跡（南東角）



柵列・壕・建物跡全景（南西から）



柵列・壕・建物跡（南西から）

空堀跡 (北西から)

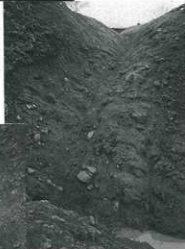


空堀柱跡



空堀跡・土塚 (南東から)

空堀跡南東端



空堀跡南東端



土塚墓

土塚墓



土塚墓



土塚墓



土塚墓



建物跡全景（南西から）



建物跡全景（北東から）



35号竪穴

37号竪穴炭化材（出入口部）



37号竪穴炭化材（柱・根太？  
壁・屋根？）



37号竪穴炭化材遺物出土状況



37号竪穴遺物出土状況（臥骨）





空墳跡張芝法面保護（北西から）



空墳跡張芝法面保護（南から）

空墳跡張芝法面保護（南東から）↑



空墳跡張芝法面保護（南東端）



夷王山墳墓群説明板



夷王山墳墓群説明板設置状況

鉄・銅出土状況

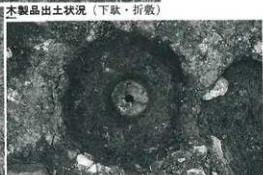


銅鏡出土状況



美濃皿出土状況

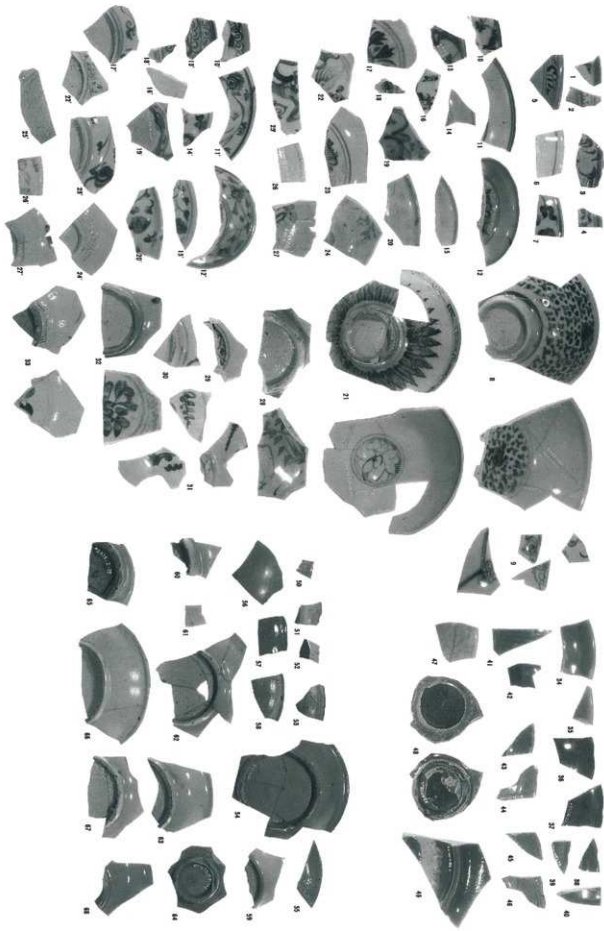
木製品出土状況（下駄・折敷）

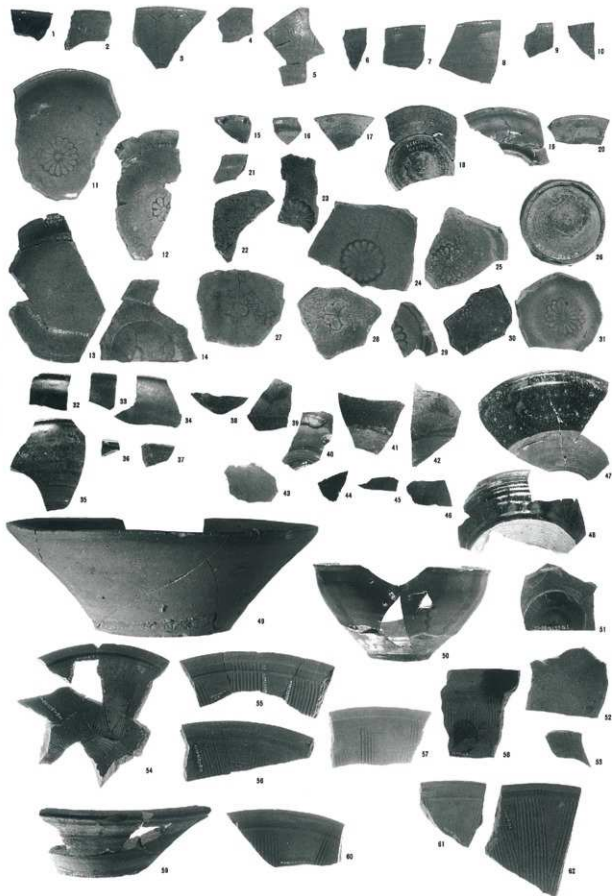


石製羽口出土状況

















P.L. 19  
出土遺物(1~5  
31  
32  
35  
45  
46  
柵列跡周辺、19  
21  
25  
28  
33  
34  
37  
44  
49  
空堀跡東平坦面、53  
39  
15  
L区トレンチ出土) 他は空堀覆土)





獸骨 37号竪穴



鑲造銅片 (37号竪穴)

粒状滓 (36号竪穴)



焼土 出土

(空塚覆土)

うるし皮膜 (35号竪穴焼土)



鑲造銅片 (35号竪穴)

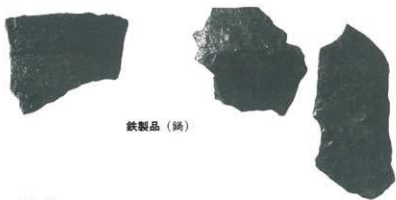


焼土 4 出土クギ他

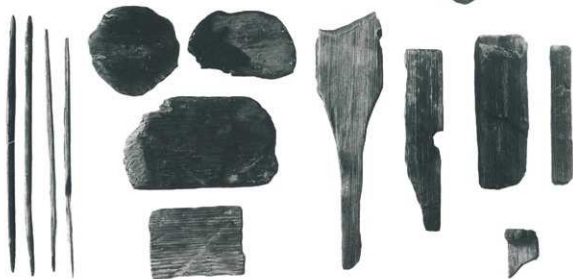




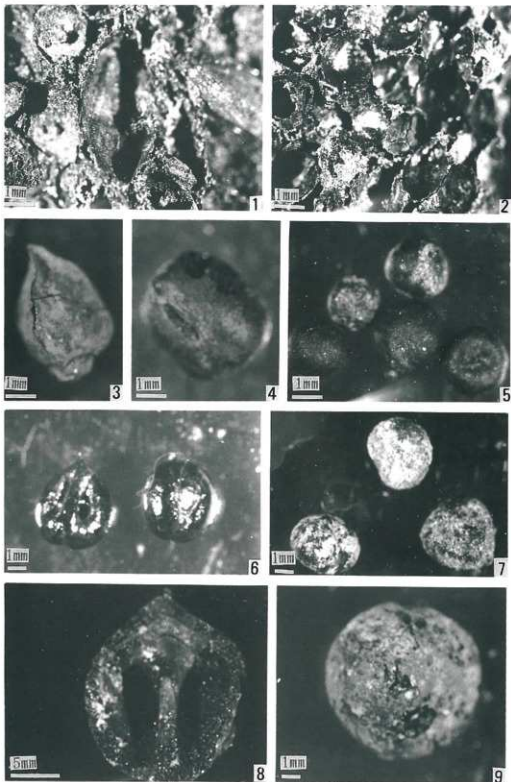
鉄製品（小札、小柄、小刀、鋸、和釘、火箸）



鉄製品（鍋）



木製品（箸・折敷・曲物底・ヘラ等）



1 イネ粒塊

2 キビ塊

3 ソバ

4 小豆

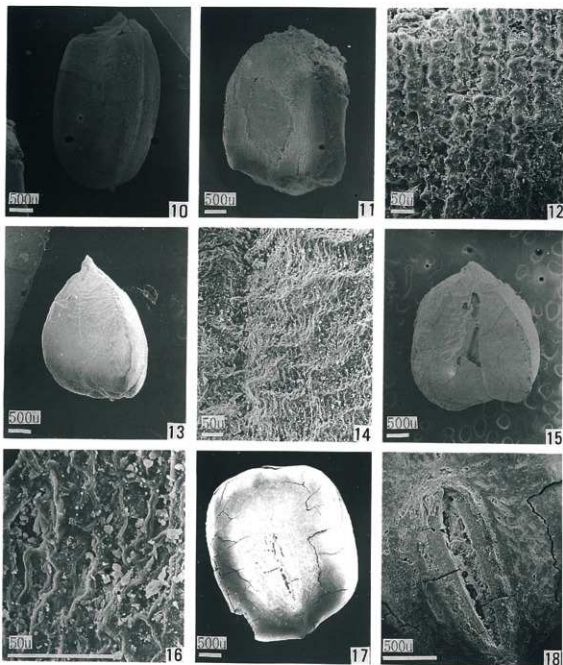
5 アブラナ科? 種子 1

6 ヤマブドウ

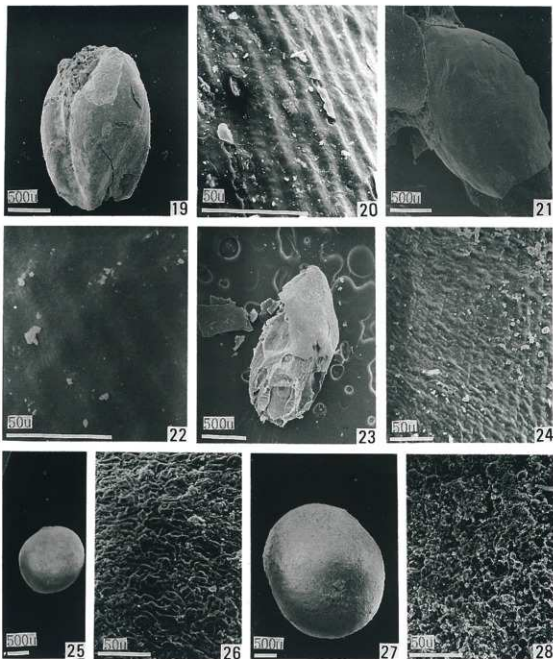
7 アブラナ科? 種子 2

8 クルミ肉果皮

9 キハダ果実



- |    |              |    |             |
|----|--------------|----|-------------|
| 10 | 稷のついていないイネ粒  | 15 | ソバ粒         |
| 11 | 稷が残存しているイネ粒  | 16 | 写真15の表面拡大写真 |
| 12 | 写真11の稷の拡大写真  | 17 | 小豆粒         |
| 13 | ソバ粒          | 18 | 写真17のへそ部拡大  |
| 14 | 写真13の表面の拡大写真 |    |             |



- |    |              |    |           |
|----|--------------|----|-----------|
| 19 | キビ粒          | 24 | 写真23中央部拡大 |
| 20 | 写真19右寄り中央部拡大 | 25 | アブラナ科A    |
| 21 | キビ粒          | 26 | 写真25表面部拡大 |
| 22 | 写真21の中央部拡大   | 27 | アブラナ科B    |
| 23 | キビ粒          | 28 | 写真27表面部拡大 |



---

史跡 上之國勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会  
北海道檜山郡上ノ国町大留100  
印刷 平成元年 3月25日  
発行 平成元年 3月31日  
印刷所 徳長門出版社印刷部

---

